

500
A2

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁹ 1 2 3 4 5

始



500-42

性蠻野の人文

著原アウム・ドァハ

補譯均川山

1921

書叢學科衆民

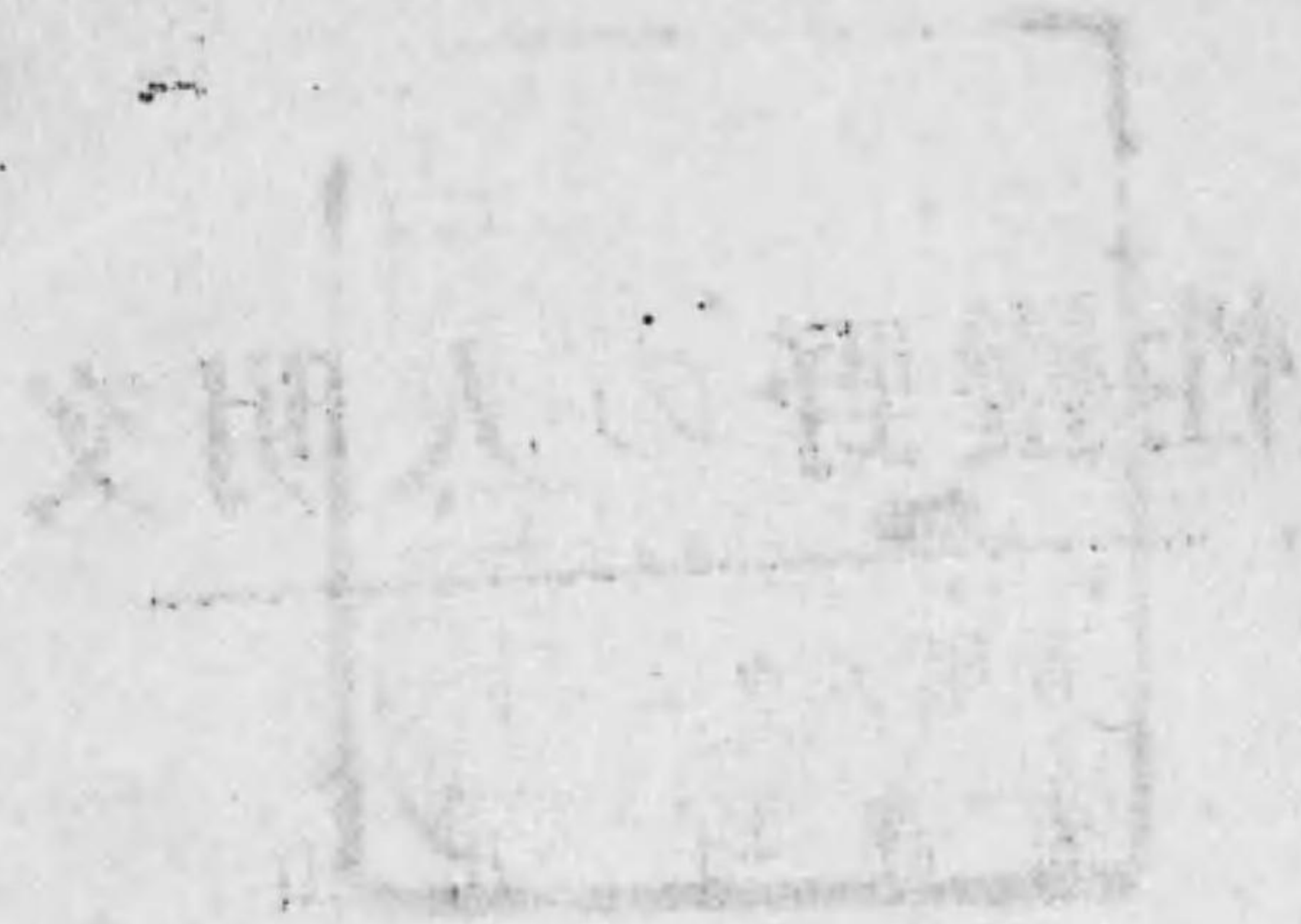
編四第

大正

11. 6. 27

内交





目次

第一講 家畜の起原……………三

講述の順序——豚飼養動物と野性動物——犬は最古の人間の伴侶——飼ひ猫の先祖——太古の馬——驢と騾馬——牛の先祖は水牛——空中の住民、羊と山羊——豚は猪から——地衣を食ふ馴鹿——我慢のよい駱駝——飼ひ鳥の色々——三種の昆虫——約説と結論

第二講 家畜に残つてゐる野生の痕……………三六

生存の闘争——廢退器官——廢退本能——犬に残つてゐる野生の遺物——猫に残つてゐる野生の遺物——母の本能——母の愛——指導者の模倣蒼空の子供——鶏の習慣——未來の奇蹟——斷崖に棲まふ鳥——豚の野性——その他の廢退本能

第三講 文明人の起原……………六六

本講の目的——英國人は何處から來た？——其他の近代人は？——

人類の搖盪——地理上の變化——人類の年齢は？——人類の分布——
最初の間——人種は何政出來たか？——文明人と未開人種——人類
時代——蒙昧人の職業——蒙昧人の性質——蒙昧人の理解力——蒙昧人
の道德觀念

第四講 文明人の野蠻性……………一三六

第四講の目的——本能の意義——習慣の意義——有用な本能と廢退的の
本能——人間の廢退的本能——恐怖の本能——恐怖の遺物——闘争の本
能——狩獵の本能——種族的の本能

第五講 文明人の野蠻性（續き）……………一八六

遊戯本能——模倣の本能——怠惰の本能——復讐の本能——利己的本能
その他の廢退本能——新しき本能の數々——廢退的習慣と制度

目次終り

文明人の野蠻性

ハワード・ムーア著
山川均譯述

第一講 家畜の起原

【講述の順序】 先づ第一講に話す「定畜家の起原」は、第三講に對する準備の爲である。そして第二講と第三講とは、次の第四講第五講に於いて、愈々文明人の野蠻性、一層正確に云へば「文明人に残つてゐる野蠻性」の話をする準備である。

そこでこの講述の初めの三講は、直接に倫理上の問題には關係がなく、唯だ間接に關係して居るだけである。初めの三講の目的は、第四講第五講をよく分らせる爲であつて、この最後の二講には倫理上の意義がある。

先づ第一に、吾々は家畜となつた動物に残つてゐる野性の痕を研究し、次に人間に残つてゐる野性の痕を研究する。しかし家畜に残つてゐる野性を研究する前に、先づ吾々は、家畜となつてゐる動物も、曾ては野生の動物であつたことを知り、そ

して是等の動物が曾てどんな生活をして居つたかを知らなければならぬ。

【飼養の動物と理性の動物】 飼養の動物——即ち家畜——の前身は、すべて野生の動物である。人間御自身も、家や、畑や、着物や、車や、藝術や科學を發明し、更に他の動物を飼ひ馴らすことを知るまでは、一度は野生の動物だつたのである。

多くの場合、吾々は或る種の野生動物を指して、之がどの家畜の先祖だと云ひ當てることが出来る。しかし或場合にはそれが出来ぬ。といふのは、或る場合には家畜化され(即ち飼ひ馴らされ)てからの變化が甚だしいので、最早や祖先たる種族と照し合はされぬからである。また或る場合には、或種屬の一部分が家畜化されかけ後、野生の儘で残つてゐた部分が滅亡したゝめに、今では全く、囚はれの特態のみ残つてゐるから、祖先の分らぬものもある。駱駝はこの第二の場合であつて、それには野生のものは無い。世界ぢうの駱駝は、必ず人間の伴侶となつて居る。

一體「野生の」といふ言葉は、人間と伴なつて居らぬ生物の種屬に用ひる形容詞

である。野生の動物といふと、時としては不自然な状態にある動物であるかのやうに聞えるが、實はそうでない。家畜の境涯と人間の境遇こそ、人爲的なものなのである。

動物を飼ひ馴らすには、色々の目的がある。羊は毛を取る爲に、馬は力があるのと速やく走る爲に、牝牛は肉と乳との爲に、豚はハムの爲に、禽類は卵と羽毛との爲に、犬は狩獵と伴侶の爲に、蜂は蜜、カナリヤは歌、金魚は優雅と美觀との爲に飼ひ馴らされる。

多くの家畜は、家畜化される(即ち飼ひ馴らされて)ゐる間に、肉體上にも精神上にも大に變化を蒙つて居る。この變化は、動物を一層完全に人間の必要に適せしめる爲に、與へられたものであつて、是等の變化は、未來幾時代の間、續いてゆく可きものである。今日の大きな林檎にしても、まづくて小さいな祖先から出來たもので、元の林檎は、吾々の贅澤な口にはとても食べられたものではない。之と同じく

印度人が初めて栽培した頃の野性の馬鈴薯は、恐らく吾々は食はぬだらう。今日では他かに結構なものが澤山ある。しかし印度人は其頃、滋養になる食料が少なかつたので食つてゐたのである。

家畜化した動物(及び植物)の大變化は、淘汰の結果である。即ち長日月の間、最もよく飼養の目的に副つたものを選んで、種子親にした結果である。百姓は最もよい王蜀黍と、最も大きい馬鈴薯とを選んで種子にする。それと同じく、彼等は最も長くて最も柔かな毛をした羊と、最もよく卵を産だ牝鶏とを選んで種子を取る。鶏も鳥である。野生の鶏は毎春卵を産んで孵化すれば、もう來春まで産まぬ。しかし卵をよく産む傾きのある牝鶏を選んで種子にしたので、年ちう卵を産む鶏を作出した。

牝牛も同じことで、今でこそ、仔を産んで一年も二年も引き續ぶき乳の出る種類が出来て居るが、野生の牝牛は、仔牛が餌につくまでの、ほんの僅かの期間しか乳

を出さなかつたものである。肉體にしても精神にしても、或る物質を幾度も幾度も繰返して強よめて往つたなら、殆んど無限にその物質を發達させることが出来る。

近頃綠色の花の咲く薔薇が出来たり、棘無し仙人掌、無核の林檎や葡萄や橙や、バナナ、やバイナツプルなどの出来たのも、この淘汰といふ單純な方法によるものである。この種の淘汰作用は人力によるものだから、之を人為淘汰と名づけて居る。

科學の教へるところによると、現在地球上にある、有りと有ゆる動物植物の種の起原は、幾百萬年の間、『自然』の手で、同じ淘汰作用が行はれた結果である。最初の動物は、最も低級なものだつた。この低級な動物から、幾千萬年の『自然淘汰』を経て、高級な動物が發達した。そして人間もそのうちの一つである。

「犬は最も古い人間の伴侶」恐らく犬は、人間の一番舊い友達である。犬が初めて飼ひ馴らされたのは、遠い昔の有史以前、多分英國がまだ大陸と地續ぶきで、マンモスと名づける毛深かな巨象が、歐羅巴の平原を彷徨してゐた頃だらう。

最初は犬は、たゞ可愛がる爲めに飼ひ馴らされたものらしいが、後に至つて退々と、狩獵や牧畜や、荷物の運搬などの用途に適した種類に發達したものである。蒙昧時代の人民は、いづれも犬を連れて居る。アメリカ印度人の主もな家畜は犬だつた。エヂプトの三角塔には、獵犬を描いたものがある。して見ると此種の犬は、犬昔に既に發達してゐたことが分かる。

犬は開化した狼である。デアキンの考へでは、犬は世界ちうの異つた場所、異つた時に、色々の種類の狼を家畜化したものである。

犬には少くとも百七十五の種類がある。犬の種類異なるに従つて、その智力や文化の程度の異なるのは、人種の間同様に同じである。スコットランド種の羊の番犬コリー種とサン・ベルナル種とは、犬屬のうちで最も進歩したものであるが、エスキモー人の犬は、馬具をつけた狼と云つてよい。容貌も狼に似て居り、狼の如く野性を帯び、耳は狼のように直立して、聲も尋常の犬よりは寧ろ狼に近い。犬が何か

言はうとする時には吠えるのであるが、野生の犬は、大抵は聲を長く引いて咆哮する。

スコットランドの高地で牧羊の行はれるのは、全くコリー種のお蔭である。コリーはスコットランド種の犬で、この地方では一般に牧羊に用ひられて居る。といふのは人間よりも安上がりな爲めである。

サン・ベルナル種は、眼と耳の見事な、大きな美しい犬である。主としてアルプス地方の僧院で飼つて居る。ベルナル種は人命救護をもつて有名である。現に五六年前に死んだ一匹のサン・ベルナルは、二十二人の生命救護を表彰する二十のメダルを頭にかけてゐた。サン・ベルナル種は、一度雪崩の爲に殆んど全滅に歸し、僅かに三頭だけ残つたことがある。

ブルドッグは大きな顎骨と、強い意志とで有名である。恐らく他かの家畜の殊に御し難い牡牛の取扱ひを助ける爲に、^犬昔に發達したものであらう。人間が家畜を

管理する爲に柵を作ることを發明したのは、容易のことではなかつた。その上、當時の家畜は今日の家畜から見ると、遙かに野生的であつて、管理も困難だつたから、恐らく強大な體と、力のある顎と意志と、勇敢な性質とを備へた犬を發達させて、半野獸的な家畜の取扱ひに用ひたものである。ブルドックが牛などに立ち向ふ場合には、きつと正面から鼻先を咬えて引き倒をせうとするのは、此説を證明してゐるものだらう。之と反對に、コリー種になると、正面から立ち向はないで、後ろから追ひかける傾向がある。ブルドック種は必要がなくなつたので、段々衰亡しかけてゐる。

ブル・テリアはブルドックの退却種である。人間の友達、家庭の愛玩物としては、人々の趣味に適しない。快活な點でも、美しい點でも、智力のすぐれた點でも、ブル・テリアは迎てもフォックス・テリアに敵はない。

タアン・スピットは體は小さくて脚は短かく、近代の機械が用ひられるようになるまでは、どこの臺所にも飼養されて居り、足踏み臼の原動力となつてゐた。蒸氣と電氣を征服するまでは、人間は常に力の不足を感じたので、タアン・スピット種を發達させ、お勝手元の手助けとした。それは丁度、人間は自分よりも速力の早い動物を捕へる爲に、獵犬を發達させたのと同じである。

ポインターとセッターとは、最近百五十年か二百年の間に出來たものである。ポインターが『指示する』のは、將に飛び掛らうとする刹那の停止を、段々に強調したものであらう。犬は不意に何物かにでくわすと、必ずそれを點檢する爲に、少しの間立ち止まる。そのうちから最も長く立ち止まるのを選んで種とした結果、遂には何物かを發見すると、屹度止まつてそれを凝視する犬の一種を發達させたものである。吾々はこの種の犬を名づけてポインター（指示者）と呼んでゐる。

犬屬は食肉動物の一團であつて、其中には狼、狐、ジャック・オール狼犬、飼犬などを含んで居る。いづれも他の動物の血と肉とを食物にする。野犬即ち狼と狐と狼犬とは、天性獍猛

疑がひ深くて不信實である。飼犬が狼の一種類から出たにもせよ、又は數種の狼から出たにもせよ、又は狼犬から出たにもせよ、又は狼から出たにもせよ、乃至は今日は既に滅亡した色々の野犬から發達したにもせよ、其初には、一般犬屬の莽猛な疑ぐり深い、不信實な性質を持つてゐたに相違ない。

犬は家畜化してから、全く性質が革命された。今日では犬は世界ちうで最も親愛な、最も忠信な、最も献身的なものである。自分にまして人を愛するものは、犬だけだといふ諺すらもある。コリー種は、その昔先祖が食物としてゐたものを、今日は守護してゐる。死に至るまで十二年間、主人の墓の上にお伽をしたグレイ・フライヤ種のポツビーといふ犬ほど、この世の中に麗はしい献身的な挿話はない。エディンバラには、この驚く可き動物の記念碑が建つてゐた。

幾世紀かの昔、どこかで初めて飼ひ馴らされて此方、犬の智力と文化との進歩は全ての動物の進歩に冠絶して居る。恐らく人間の進歩にすらも優さつて居ると云つ

ても過言でない。

【飼ひ猫の先祖】 飼ひ猫は野生の猫から來た。但しアメリカ産の野猫ではない。

何故ならば、猫は白人がアメリカを發見するすつと以前から、家畜となつてゐたからである。野猫は尾の長いものと短いものがある。飼ひ猫は無論尾の長い或る種類恐らくは北アフリカの尾の長い野生の猫を飼ひ馴らしたものである。

猫が家畜となつてからの年月は、犬ほどに長くない。その上猫は、犬ほどに、献身的の性質や智力を標準にして淘汰されて來たものでない。猫は長日月の間、唯だその任務とするところは、鼠の如き人家の小侵害者を滅ぼすことで、たま〜音樂的な喉の音で人心を温ためた。猫は天然の性質からさほど改良せられては居らぬがそれでも火鉢の傍に相應しい裝飾品と見做されて居る。

そこで人間が飼ひ馴らした食肉獸は、猫と犬だけである。南アジアと北アフリカの豹の一種チーターが、時には狩獵に用ひられたが、大して成功しなかつた。ロー

マ人はまた鼯鼠を飼ひ馴らした。その他の家畜は、すべて有蹄動物または鳥類、魚類、虫類である。

【太古の馬】 蒙昧時代から文明に進む頃は長い長途の旅行中、馬は人間世界の労働の、無くてならぬ大切な部分を負擔して來たのである。平時にも戦時にも、馬は人間に取つて何時も變らぬ助手であり伴侶であつた。印度人は鎧をつけた、馬に跨がつた、コルテツの戦士を初めて見て吃驚した。彼等は乗つて居る人間を、馬の體の部分と勘違ひした。彼等は馬と人間とを、一匹の動物と思つたのである。

歐洲人の渡來前から、アメリカには馬がゐたように想はれてゐるが、之は間違ひである。印度人は馬は愚か小馬も持つてゐなかつた。彼等の爲に駄馬の役目をしたのは、女であつた。尤も駱馬は南アメリカで幾らか用ひられてゐた。先年まで、北アメリカの西部に幾らもゐた謂ゆる『野生の馬』は、實は野生の馬ではなくて、飼ひ馬が半ば野生の状態に退歩したものである。

馬が初めて飼ひ馴らされたのは、多分中央又は南部アジアである。人跡の稀れた中央アジアの或地方には、今日でも野生の馬が居る。彼等は少數の馬群を爲して平原の草を食ひ、何物かに驚かされると、團體のまゝで逸走する。

馬の祖先を、岩の中の化石にまで溯ぼつて見ると、大きさは狐ほどで、前脚には四本、後脚には三本の指がある。そして今日の馬は、この拇指の最も端の關節——拇指の爪——で歩るいてゐるのである。馬の蹄は、自然がこしらへた此種の考案のうちで、最も上出来なものである。蹄は爪又は鈎爪カギヅメの變形である。初めて馬靴を發明したのは、紀元前四百年代のギリシヤ人かローマ人である。

シエットランド小馬は、シエットランド諸島の産であつて、多分岩石の多い、狭くてしかも暴風に曝らされた、不便な境遇におかれて退化したものであらう。一體、馬の前髪は近代のもので、野生の馬には無い。有史以前の如何なる馬の繪を見ても今日の如何なる種類の馬にもある前髪は無いのである。犬の吠えるのと同じように

馬の前髪は飼ひ馴らされてゐるうちに、發達した新しい特徴なのである。

【驢と騾馬】 驢は馬の従兄弟で、同じく馬屬である。兩者の間に密接な關係のあることは、雜種が取れるので分かる。驢馬は至つて弾力性に乏しい動物で、従つて大して變化せぬ。野生の驢馬は今も尙ほ、中央アジアの、沙漠に均しい原野に、うろついでゐるが、飼ひ馴らした驢馬も、大して野生のと變りがない。

驢は今日の文明世界では、何だか時代錯誤の感があるが、二三世紀前までは、極めて有觸れた動物であつた。今日は主として、車の通せぬ場所などで用ひられ、我慢よくて足元は確かだが、歩くのが極めてのろい。要するに過去のものであるいづれ水牛やアメリカ印度人など、同じ運命を辿るものだらう。

騾馬は馬と驢との雜種であるが、兩親のよいところを併せ持つて居る。即ち驢の忍耐力と脚力とに、馬の力と大きさと活潑とを兼ね備へて居るので、とても馬には堪えきれぬ苦役や、又は熱帶地方で用ひるのに適しに居る。英國や、北部歐羅巴や

アメリカの北部では餘り用ひられて居らぬが、西班牙、佛蘭西、アメリカの南部や南アメリカなどでは、一般に荷駄に使はれて居る。米國南部の殖民地へは、ワシントンが輸入したのである。

騾馬は牝馬と牡驢との間に出來た混血兒で、聲は父親に似て驢一流の鳴き方をする。牝驢と牡馬との間に生れたものはジンニー、又はゼンネットと云ひ、騾馬とは大分違つた動物である。嘶く聲は馬に似て、決して驢や騾馬のような鳴き方をせぬ。そして身體一般の構造も馬に近い。形は騾馬よりも小さく、西班牙などで間々見受けける。

【牛の先祖は水牛】 野生の牛には四種類ある。そして北アメリカ、歐羅巴、南アフリカ、南部アジアと云つた風に分かれてゐる。しかし何づれもみな牛屬ブナスボスに屬してゐる。アメリカの野牛は水牛ブナブロー又はバイゾンと云つて、曾ては多數の群團を造つてマインからロッキーマン脈に到る地方に棲まつてゐた。しかし今では動物園などに飼

はれてゐるのを見るだけである。

歐羅巴の野牛アウロクヌスも曾ては多数に棲んで居つたが、今日は僅かに露西亞の禁獵苑に残つてゐるばかりである。

アジャ種の野牛は、比律賓の水牛であつて、今も尙ほ野生のまゝで藪の中などに居る。印度では古くから飼ひ馴らされてゐた。

アフリカ・バフアロー若くは喜望峯バフアローは、未だ曾て飼ひ馴らされたことがない。大きな力の強い悍猛な動物で、銃劔の如き角がある。土民は獅子以上に恐れて居る。

今日の牛の祖先は能く分らぬが、多分歐羅巴の野牛だらうと、一般に想像せられてゐる。人間は牛を家畜として飼養するすつと以前から、恐らく野獸として、狩獵の目的にしてゐたものである。

アメリカの野牛は草地を好み、歐羅巴の野牛は森林を好む。しかしアフリカの野

牛は沼地や水の中に棲まつて居る。今日の牛は本來は森林の動物であつて、今もどちらかと云へば、林の中などを、逍遙することを好む。

乾牛は一般に、物を牽かせる爲に用ひられたが、今日では主として乳と肉との爲に飼養せられて居る。若し人間が肉食を廢する時が來たならば、馬をも搾乳用の動物に發達させるに相違ない。

ムユリー種は、人間の發達させた無角牛である。角は防禦の武器であつて、敵の居らぬ牧場や牛小舎では、武器は勿論必要がない。

【空中住民、羊と山羊】 羊も山羊も山地の住民である。大陸には大抵どこにもあるが、常に人間の近づき難い高地に住まつてゐる。彼等は殆んど、蒼空あまぞらに住まつてゐると云のでもよい。之は熊や狼などの毒牙を免かれる爲に、段々と空の方に追ひやられたものである。そして今ではこんな嶮岨と寒氣の爲に、熊も狼も近よることの出來ぬ高地に追ひつめられて、岩から岩を渡つて生きてゐる。

飼ひ馴らされた羊と山羊の祖先は、アメリカ種ではなくて、アジア種である。アジアは、人類の搖籃だつたと共に、文化の搖籃であつた。人間が其同僚たる人間を、家畜化することを發明したのもアジアである。多くの家畜化された動物が、アジアから出たのも尤もであつて、彼等は長い時代の間、動物を飼ひ馴らすことのみやつてゐた。多くの羊の種類は、僅かに最近數百年の間に現はれたものである。

山羊は高山の峻酷な自然のうちに發達した動物で、彼等の祖先は、どんな食物でも生活した。今日家畜となつてゐる山羊が、殆んど何でも食つて、生きて居るのは之が爲である。

羊と山羊とは、毛と乳とを目的として淘汰せられたもので、決して智力を標準にして淘汰されたものではない。そこで今日の羊も山羊も、智力は依然として低級である。毛の長い立派な山羊は、恐らく其智力になると野生の祖先にも劣つて居る。

【豚は猪から】 家畜の豚は歐羅巴、アジア、小アジア、北アフリカなどの野猪の

子孫であつて、今日でも、容易に本來の野生の状態に跡戻る。俗に『野豚』といふものがあるが、あれは人間の飼養を脱して、野生に歸つた豚である。

野猪は小さいな集團をなして生活して居るで、お互同志の間は極めて親密で、極めて忠信である。野猪は悍猛な自己中心の我利々々亡者のように思はれてゐるが、其中の一匹が災難に罹つて助けを求めると、一團のもの擧つて脊中の剛毛を逆立て、怖る可き呐喊の聲をあげて救援に趣くのである。彼等はお互ひの急を救ふためには、生命をも犠牲とする。彼等は其短い、力のある鼻で木の根を掘つて食つて居る。

支那と東方諸國の豚は、恐らく歐羅巴の野猪とは別種な、印度の野猪から發達したものである。野猪の耳は立つてゐる。之は象を除く全ての野獸の特徴であつて、耳の垂れて居るのは、家畜化された結果である。

【地衣を食ふ馴鹿】 英語のレーンディヤール(馴鹿)は、レーン(手綱)とデイヤー(鹿)といふ言葉から出來たものではなく、レーンはラップ語の『牧場』であつて、即

ち「牧場の鹿」といふ意味である。

馴鹿は北半球の三大陸、いづれにも棲まつて居る。フメリヲ馴鹿は東半球のとは少し異つてゐて、リプウと名づけるものである。シベリア人、ラツブランダー人は馴鹿を馴らして、それから乳と肉と皮とを得る上に、橇を牽かせて居る。近年米國政府は、馴鹿の大群をアラスカに移入したことがある。馴鹿は橇を牽いて、一時間よく十哩、一日よく百哩の速力を出す。

馴鹿は夏は木の小枝、ことに樺や柳の小枝を好んで食ひ、冬は北極及び亞北極地方に繁茂する地衣の一種、謂ゆる「馴鹿苔」を食物とする。

【我慢のよい駱駝】 駱駝は沙漠の動物で、北アフリカ、中央及び西部アジアの大沙漠に棲んで居たが、今では最早や野生のものは居らぬ。今日ではアフリカ及びアジアの沙漠に於ける、主たる運搬機關になつて居る。

駱駝には一峰駱駝、一名アラビア駱駝と、二峰駱駝、一名バクトリア駱駝との二

大種別がある。一峰駱駝は北アフリカ及びアラビアに居り、普ねく乗用に用ひられて居る。之に反して二峰駱駝はアジア種で、黒海から東の方、シベリアを通じて、チベット、支那などに居る。駱駝の種類が多いことは、殆んど馬にも匹敵する。彼等のうちには、赤道直下の灼熱した、沙地に適したのもあれば、シベリアの雪に適したものもある。又た快速力をもつた競走種もある。

駱駝は不思議な動物で、荒寥たる沙漠の生活に、驚くほどよく適して居り、連も他の動物の代用を許さない。その足の指には肉趾があつて、沙の中に深く沈まぬようになつて居るのも、還境に對する順應の一つである。また駱駝には四個の胃袋があつて、其一つは水を貯へる瓶になつて居る。之もまた順應の一つである。

脊の上の肉隆は脂肪の貯藏であつて、一種の兵站部をなして居り、長途の沙漠の旅行中には、こゝから營養を取るのである。駱駝の脊骨が突起してゐるかの如く思つたら間違ひで、脊骨は牛や馬と同じく真直ぐである。肉隆は單に脂肪の貯藏であ

つて、食物缺乏の場合の用意を、背の上に運搬してゐる譯である。であるから肉隆は、食物の豊富な時と乏しい時とで、大きくもあり小さくもある。羊の一種類にも餘分の脂肪を尻尾に貯藏するものがある。

駱駝は恐ろしく我慢が強く、二十四五貫の重荷を積み、ぬかり込んだ沙の中を、一時間五六哩の速力を以つて、二十四時間中の十五時間位は平氣で歩く。一日一度一塊りの大麥粉さへあれば、荆棘いばしと仙人掌との外に何の食物もなく、一滴の水さへもなく、よく一週間の旅行をつゞける力がある。何故ならばその胃袋には、飲料と食物とを携帯して居るからである。駱駝は美しいものではないが、不思議なものである。

駱駝は驢と同じく、少しも變化せぬ。太昔から使用せられて居るにも拘らず、今尙ほ、全然は家畜化せられて居らぬ。駱駝は憤りや嫌惡の情を表はすには、唾を吐きかける奇習をもつて居る。荷を積む間は跪まづくが、それでも荷を積まれる間は随分不平らしく呻めくものである。そして積荷が餘り重過ぎると、決して立ち上らない。

駱馬ラクマは南アメリカ産の羊駝シンプカマの一種で、完全に家畜化されて居り、幾らか荷駄にも用ひられて居る。

アルバカ(羊駝)は駱馬の従兄弟で、印度人の飼養したものである。其毛はアルバカ織になる、アルバカの織物は、古代ペルーヴィア人の墓から、発見されたことがある。アンデス山脈の高地では、アルバカは半ば野生の状態で、群集生活をして居る。

【象の前身】 象にはアフリカ象と、アジアの印度象との二種がある。アフリカ象は上古のカルタジニア人が、飼ひ馴らした以外には、曾て家畜化されたことはない。耳は大きくて、兩性ともに長い牙がある。前額には突起があつて、性質は獐猛である。印度象は古くから家畜となつて居り、額の中央が凹んで居り、耳は中位の、牡だけ長い牙をもつて居る。象は昔から王侯貴族を初め、權門勢家の虚榮を滿たす、愛

頑物となつてゐた。

象は飼養中に仔を産むことは罕れであるから、其都度、叢林の中から捕獲して來なければならぬ。象を捕へるには、飼ひ馴らされた象を用ひる。そして飢と疲勞との爲に閉口するまで、柵の内に繋いでおくのである。

印度では、象を虎狩に使用する。象の鼻は驚く可き順應器官であつて、彼等は之で鋸を取扱つたり、針を拾つたりする。

人間が家畜化した動物のうちで、恐らく象ほど、よく馴致に適した性質を供へたものはない。犬を今日の状態までにするには、數千年の歳月を要したが、象は叢林の中から、生捕つて來て、僅に數ヶ月間に、從順で聰明で、しかも親切な従僕となる一切の變化をする。象は記憶力がよく、愛着と復讐心とに富む賢い動物であつて、自分の受けた好意と悪意とを長く忘れない。

曾ては象は、濠洲を除く何づれの大陸にも棲まつてゐた。即ちマンモス（巨象）

は歐羅巴の象であつたし、マストドンは、南北兩アメリカに棲んでゐたが、人類發生の頃から消滅した。最初の象として知られて居るのは、地質學上の第三紀最上期の頃に、エヂプトに棲まつたもので、鼻は今日のように長くはないが、握れるほどの長さをして居つた。牙も野猪ほどの短いもので、ほゞ小馬ほどの大きさであつた。

【飼ひ鳥の色々】 飼ひ鳥又は鶏の學名は、ガル、ス・ドメスチリスであつて、家禽といふことである。鶏が第一番に飼ひ馴らされたのは、人間が第一番に良心を家畜化したアジアの印度地方である。鶏の祖先は、今も尙ほ野生のまゝで、印度の叢の中に居る斂鳥である。羽の色は暗赤色で、低い樹の上にとまり、巢は地面に作る。牡は勇猛な戦闘者であつて、その子孫が今も世界の到るところでやつてゐるやうに曉け方に歌ふ習慣がある。赤味をもつた羽毛と、すらりと引締まつた體は、好戰的性質をもつた、今日の鬪鶏に最もよく祖先の型が残つて居る。即ち今日の鬪鶏こそ、他の種類に比して最も野生に近いものである。

孔雀も南部アジアの産で、彼處では今も野生で存してゐるが、飼養せられて居るものも、野生のと大差はない。羽根の色彩が美しい爲に飼養せられるもので、同類の間にも同情が乏しく、孤獨を好む傾向がある。

珠雞ホロホロチウはアフリカの産で、今でもまだ充分には飼ひ馴らされて居らず。半ば野生の状態にある。米國の南部を除いては、滅たに飼はれて居らぬ。

七面鳥はアメリカ産の鳥で、印度人の爲に弓矢で獵られてゐたものである。翅の力が弱いのと、同じ地域に棲む習慣があるので、容易に飼ひ馴らされる。そこで印度人の間にも飼はれてゐた。この鳥は初め土耳其タキキから、渡つたものと思ひ違つたので、英國人はターキーと呼んだのである。

駝鳥はアフリカ産の沙漠鳥である。駝鳥の飼養されたのは、ほんの近頃のこととて、目的は尾と翼の羽根であつて、裝飾用としては比類がない。駝鳥の羽根は、他かの小鳥の羽根よりも美しいばかりか、抜き取るか蒔り取るものだから、用ゐるにも残酷

を感じない。南アフリカ及び南部カリフォルニアには廣大な駝鳥園がある。野生状態にあつても飛翔せぬ鳥は、駝鳥だけである。

鶯鳥はカナダ産の野生種の子孫であつた、北半球到るところに居る。色は灰色で沼澤や水の邊りを好み、葎や草の中に棲つて産卵する。飼養されて居るものも、大部分は野性を存して居り、野生のものと同じ行動をする。鶯鳥の飼養も同じく羽根を取るのが目的である。

家鴨は鴨である。野生の家鴨は、翅が強くて見事な飛び方をする。グリーンランド、アイスランド、ラップランド、シベリヤなどで夏を越し、印度、エヂプト、それからアメリカのイスマリア地方などに冬越しをする。

飼養されて居る普通の鶺鴒ハシチウは、東部歐羅巴及び西部アジア産の陸鶺鴒から來たものである。羽毛は純白で嘴は赤く、其尖端に黒い瘤がある。

笛吹き鶺鴒は、アイルランド、ラップランド、北部ロシヤなどに居る。その氣管は螺

旋をして居つて、喇叭のような鳴き方をするので此名がある。冬は熱帯地に移住する。北半球の鵠はすべて白色であるが、南半球のは、多いか少いか黒色を交えて居り、濠州のは純黒である。黒い鵠は古くから談には聞いても、誰れも實際あるとは思つてゐなかつた。黒色の鵠は、今では野生としては残つて居らぬが、濠州では廣く飼養せられて居る。

カナリアはカナリー群島の産で、かしこには今も尙ほ野生のまゝである。この鳥は殆ん全世界の到るところ、有り觸れた飼ひ鳥となつて居る。金翅雀カハコビとウオアブラーとを、俗に野生のカナリヤと云つてはゐるが、本國以外には、野生のカナリヤは居らぬ。

鳩の飼ひ馴らされたのは、三四千年前からのことで、家鳩には傳書鳩や、宙返りをするタムプラー、奇妙な聲をする喇叭鳩、胸張鳩、扇子を擴ろげたような尾をしたフアンテイルスなど、今は恐らく二百種ほどあるが、悉く歐羅巴産の岩鳩から來

たものである。鳩は一生涯、同じ夫婦で交配する。飼鳥のうちで、一夫一婦制の行はれてゐる唯一のものである。鳩の親鳥は腴えびくろのうちで半ば消化した、穀類の汁を吐き出して、雛を育てるので、『鳩の乳』といふ言葉がある。岩鳥は藍色を帯び、翼には二筋の黒線がある。岩の間に巢くふので岩鳩の稱がある。

【三種の昆虫】 學問上に知られてゐる昆虫は、五十萬種以上あつて、動物界の大部門をなして居るが、人間に飼養されて居るものは、その中の僅かに三四種に過ぎぬ。昆虫は荷物を脊負はせるには、小さい過ぎるし、さりとて食物にもならぬ。そこで飼養せられてゐるものは多くない。

恐らく最初に飼養された昆虫は、蜜蜂である。蜜蜂の出處は舊世界であつて、アメリカには原産してゐなかつた。今日見るアメリカの野生の蜜蜂は、飼養中の蜂群が逃がれて野生の状態に復へつたものである。現今では蜜蜂は、荷も花の咲くところ、その上蜜を造る季節が可なりに長く、冬ちうの蜂の食料に、充分な貯藏のでき

る所なら、どこに往つても飼養せられて居る。蜂は『パン』と蜜とで生きて居る。蜜は花の分泌する甜液であつて、それは花が蜂に與へて、異花受胎の勞に酬ひたものである。蜂は蜜を吸ひ、一度胃袋に入れて巢に運んで來る。歸ると再び蜜房のうちに吐き出すのである。蜂の『パン』は花粉であつて、蜜蜂は後脚の籃に入れて、花粉を運搬する。花によつては、花粉ばかりで少しも蜜を出さぬものがある。この種の花の匂ひは萼が葉にあるもので、香ひ野薔薇は、花よりも葉に匂ひがある。野生の蜜蜂は、木の洞や岩窟などに巢を作る。熱帯では年ちう花が豊かにあるから、蜂は蜜を貯へない。蜜蜂の社會組織は極めて高級なものであつて、如何なる有脊椎動物——人間ですらも——企及すべからざるものがある。

蠶は決して蠕虫ではなくて、幼蛾なのである。随分古くから飼養せられたもので、原産地は支那の高地で、支那人が初めて飼養した。その目的は云ふまでもなく幼虫が蛹に變形する時に造る絹である。絹は蜘蛛の絹と同じように、幼虫の腺内に

ある時には液體をして居るが、空氣に觸れると固まるのである。

支那と日本と佛蘭西とは、最大の絹糸生産國であつて、一千萬人以上の人間が、絹糸産業に携はつて居る。蠶の蛾は久しく飼ひ馴らされてゐる爲に、飼鳥と同じく飛翔の力を失つて居る。その幼虫は桑の葉を食物とする。

臙脂虫はメキシコ産の、小さいな赤いカメ虫であつて、其美しい體からは臙脂が取れる。即ちこの虫を乾かして粉末にしたものが臙脂であつて、印度人は西班牙人の渡來前から、塗料として用ひてゐたが、歐羅巴人は久しい間、何かの種子だとばかり思ひこんでゐた。其後この虫は西班牙やカナリー島に移殖され、今では全世界の供給の大部分は、彼處から出るのである。

【約説と結論】 海綿虫と蠟とは、現今では馬や小麥と同じように、世界の諸地方に培養せられて居り、或る意味では飼養動物と見做してよい。たゞ海線や蠟の飼養には、海底を農場とするものである。

そこで今、蠟と海綿と、それから前記の三種の昆虫とを除いたなら、人間が飼ひ馴らしてゐる動物は、すべて脊椎骨のある有脊椎動物である。そして金魚と龜とを除けば、人間の従僕中に代表せられてゐる動物は、いづれも血液の暖かい鳥類と哺乳類ばかりである。そのうちでも多数を占めて居り、且つ最も重要なものは、蹄をもつてゐる動物、即ち有蹄類であつて、犬と猫とを除けば、皆な植物を主食物とするものである。就中主もな荷駄用の動物は、恐くみな嚴格な菜食者なのである。

次に飼養動物の大多数は、アジアの原産であつて、馬、驢、犬、騾馬、水牛、羊、山羊、駱駝、象、蜜蜂、蠶、鶏、孔雀、鴛、家鴨、鵠、金魚、みな然りである。唯だ牛と鳩と馴鹿と豚とは歐羅巴の原産で、アメリカは七面鳥、アルバカ、駱馬、豚鼠、^{ギニアピッグ} 臘脂虫を出し、アフリカは猫と珠鷄とカナリヤを出してゐる。アジアから一番多く出てゐるのは、面積の廣いことや、動物の種類が多い爲ではなくて、アジアは人類の本土であり、人類發祥の大陸であつて、かして人間は、初めて動物を飼

ひ馴らすの程度にまで、進歩したのだからである。

現今人間と交渉のある動物は、殆んど二百種、植物は約一千種に上ぼつて居る。これ等の動物は、食ひ飲み且つ呼吸する生物であつて、彼等は苦痛を感じ、快樂を感じ、子孫を造り、子孫を愛することは人間と同じである。ところが彼等は自然の環境から引離なされ、殘酷な、時としては、戰慄すべき生活状態を強制せられてゐるのである。遠き未來には、人間は是等の生物も、自分と同じ一族であることを知り、今日とは全く異つた待遇をするようになるに相違ない。デアキンの云つたように、『下級動物に對する同情は、人間天賦の尊い徳である。』

第二講 家畜に残つてゐる野生の痕

【生存の闘争】 動物はその環境に順應してゐるのが常である。彼等はその環境の裡に、生活できるような形と構造になつて居る。彼等はその環境に適合して居つて、如何にも熟練な名工が、その場所々々に切り食はして造つたかのようなものである。彼等は生活する爲に、丁度無くてはならぬ器官を持つて居り、丁度なくてはならぬように、それが按排せられて居る。

斯ように生物が、不思議なほど環境によく順應してゐるのは、造物主の技倆と恩恵との爲めだと思はれてゐた。動物はすべて、丁度吾々が今日見るまゝで、始めからあつたものだと思はれてゐた。ところが今日では、動物がその環境によく順應して居るのは、全世界に亘つて行はれてゐる生存の闘争、その結果として起る適者生

存の爲だといふことが分つて來た。生存の闘争の爲に、多くの動物は滅亡する。そして唯だ少數の動物が生存する。そしてこの少數こそ、最もよく環境に適したものである。そこで貳百萬年の間、絶えず適者生存が行はれたゝめに、今日では各々その環境にしつくりと適合した、性質や身體をもつた色々な種が出來たのである。

地球の上には、生き永らへられるよりも、多くの生物が産まれて居る。即ち地球上には、生命の生産過多がある。産まれたものが、皆な生き存らへるだけの食物もなければ、空氣もなく、場所もない。専門家の計算によると、一番の雀の産んだ子が、一つも死なずに育つてゆくとすれば、二十年間にはインディアナ州一ぱいになるといふことである。海ざり蟹は、一度の産卵期に一萬の卵を産み、蟻は二百萬の卵を産む。白蝶の雌は成長すると、何にもしないで卵ばかり産むものであるが、一日八萬つゝ數ヶ月間引續いて産卵する。ヂブシー蟻の一對の雌雄の産んだ子が、自由に殖え

たなら、八年間で全米國のすべての植物を絶滅する。鰻は一生涯に一度しか卵を産まぬが、大きさによつて、五百萬乃至二千萬の卵を産む。或る下等動物の繁殖力は極めて急速であつて、若しすべてが生き永らへたなら、數日間海が一ぱいになる位ひである。海賊の卵がすべて成長したならば、二十五年間には、この地球の大いさほどの、海賊の塊が出来るのである。

斯ように動物の生産過多は、勢ひ全世界を通ずる生存の闘争となつて来る。地球はその戦場である。地球以外のところでは、どんな事が起つてゐるかは知らぬが、兎も角吾人が産みつけられたこの地球の上では、生は一つの大なる悲劇である。そして、幾百萬年の昔、この地球の上に生命が現はれてから此方、斯ような悲劇は引續いて居るのである。

今日學問上に知られて居る動物は、約一百万種ある。即ち一百万種ばかりが、人間に知られて居り、それ以外の名稱がつけられて居る譯である。しかし其他かにも、

まだ知られても居らず、分類もされてゐない動物が、恐らく一百万種もあるに相違ない。ところが學者の推定によると、現在地球の上にある動物の種類は、二十倍乃至百倍くらいの動物の種類は、曾て地球上に生存して居つたが、今では全く滅亡してしまつたのである。二十倍乃至百倍といふのは、動物の個體の數ではなくて、種類の数だといふことを記憶して頂きたい。吾々が毎日歩いてゐる地底の岩も、曾ては吾々と同じく呼吸をし、生存をしてゐた幾億といふ動物が眠つてゐる墓である。これ等の事實を考へて見ると、この地球上に行はれてゐる生存の闘争とは、一體どんなもので、どれ程のものかといふことか、臆ろげながら分かるのである。

【廢退器官】 『廢退』^{ウエストイナル}といふのは、『殘存物』とか、『痕跡』といふ意味であつて、『廢退器官』といふのは『殘存してゐる器官』といふことで、今日では最早や用ひられて居らず、従つて漸次に消滅しかけて居る器官を指すのである。

生存闘争の結果として、色んな動物の種類は、斷えず互ひに取つて代はり合つて居

り、断えず或る環境から追ひ出されて、異つた環境の中に生存することを餘儀なくされて居る。そこでいま或る一つの種が、自己の適合して居つた環境から、異つた環境に追ひやられた場合には、或る器官は最早やこの新環境の下では、必要がなくなつて来るが、必要のないながらも、矢張り残つて居ることになる。それと同時に一方には、今まで持つて居らぬ何等かの器官が恐らく必要になつて来る。そこで吾々のお母さんが、不用になつた着物を、入用な胴衣に仕立代へて呉れるように、必要がなくなつた器官を、新たに入り用になつた器官に拵らへ替へるといふことも、出得來ることである。

鳥の翅は之と同じ具合に、蜥蜴の前趾から拵らへられたものである。鳥類は蜥蜴のような、爬虫類から發達したものだが、鱗のある蜥蜴から羽毛のある鳥類に變化する際に、蜥蜴の前趾は鳥類の翅になつたのである。鳥類の翅の大體の構造は、蜥蜴の前趾の構造と同じであつて、いづれも上膊骨、尺骨、橈骨、前腕骨、それから

三列の掌骨とで出來上つて居る。蜥蜴には五本の指があるが、鳥の翅には二本だけ無くなつて居る。

しかし不用の器官が有用の器官に變形するのは例外であつて、大抵の場合、不用になつた器官は、その儘うちやられるのである。

或る器官が用ひられずにあると、段々消滅するのが規則である。仕事をせぬ器官は營養を受けぬから、段々に衰退する。また用ひられて居らぬ器官は、自然淘汰によつて、強よめられてもゆかぬ。そこで或る器官が、久しく不用のまゝであるれば、漸次に萎縮し衰退するばかりでなく、終には全く消滅するのである。斯うにして消滅してしまつた器官の例として、動物學者に知られてゐるものは殆んど無数にある。蛇の脚が消滅したのも其一例である。蛇は蜥蜴から發達したもので、もと／＼四本足で歩いてゐたものである。ところが生存調節の結果、歩いてゐるよりも、ぬたゝく、ぬたゝくの方が有利となつたのである。尤もこの變化が起つてから、非常に長い時間が経

過したので、僅かの場合を除く外、脚の痕跡は全く消滅してしまつて居る。

動物界には、不用となつた器官が萎縮し衰退した状態で、今尚ほ残つてゐる實例が澤山ある。是等の器官は、曾て祖先の動物には充分に發達して居り、また有用なものであつたが、生活の状況が變り習慣が變つたため、今は不用に歸し、漸次に消滅しかけて居る。此種の器官を廢退器官と名づけて居る。

廢退器官とは、仕事のない器官である。是等の器官は何もすることがない、そして久しい間の怠惰の、必然の酬みを受けて居る。或る器官が退化して居る程度は、其の器官が不用になりかけてから經過した、時間の長さによるものである。そこで廢退器官とは、不用にはなつたが、まだ全く消滅するに至らぬ器官なのである。

人間の體にも其他の動物にも、澤山の廢退器官がある。高等の動物には、すべてこの種の器官がある。その一例は、人間の體にある蠱狀突起であつて、之は蠱狀突起炎の場合には切取る、無用の器官である。ところが此器官は、多くの下級動物では

消化器系統の一部を成して居る。食物が其中に入ると、化學的の液體を分泌し、胃や腸と同じく養分を血液中に吸収する。鼠の蠱狀突起の大きさは胃袋ほどもあり、食物は一定の時間そこに止まつて特殊の作用を受ける、第二の胃袋ともいふ可きものである。然るに人間では、この器官は何等かの理由（直立の姿勢を取る爲か）も知れぬ）で不用になつて居る。そして何かの拍子でない限り、食物は決して入らない。且つ營養が不良で非常に弱くなつて居る爲に、動々ともすれば病氣を起しがちである。

尚ほ人間について他かの例を挙げると、耳の筋、尾と尾の筋、智齒、それから全身の毛髪などがそれである。岩窟内の魚や土龍の目も廢退器官である。何故かと云へば、是等の動物は暗がりに住まつてゐて、目は不用である。彼等は目は持つて居るが、盲目である。目は唯だ昔の名残りである。家畜化した牛の角も、同じく廢退器官である。ところが野生の牛には、角は防禦の武器であつて、狼や熊の世界では

彼等の頭の上にこの銃劔がなかつたなら、野生の牛はとくの昔に死に絶えて居つたらう。とかく人間の牧畜にある牛には、銃劔は無用である。そこで人間は、この不用の部分を切り去るのである。

鯨の後脚も廢退器官である。鯨は曾ては陸上の動物で、四ツ脚で歩いていた。しかるに生存闘争の結果、彼等は海中に退ひ込まれた。そしてこの新しい環境に順應して魚の形を取つたのである。鯨には尙ほ前脚があるが、後脚は殆んど消滅して、痕跡が残つて居るだけである。博物館に住つて鯨の標本を見ると、丁度後脚のありそりな場所に、二つの小さい骨が、脊骨からぶら下つて居る。

多くの動物には廢退したあしのゆびがある。牝牛には、二つの有用な趾の丁度後ろに、二つの不用な趾がある。羊も豚も鹿もその通りである。犬の前脚の一本の趾も其通りで、決して地面にはつかぬ。原形の哺乳動物（色々の種類の哺乳動物の發達した、根元となつた種）脚には、各々五本の趾がある。そして多くの哺乳動物の

脚は、今も尙ほ五本の趾のある型を留どめて居る。人間も其通りだし、猿や象も其通りである。ところが趾が一本乃至は一本以上無くなつた種も多い。河馬の趾は一本無くなつて四本残つて居る。犀のは二本無くなつて、三本残つて居る。ところが馬のは四本無くなつて、一本だけ残つて居る。馬は拇指で歩いている。しかし何づれの場合にも、無くなつた趾の痕跡だけは残つて居る。

ガラス蛇は普通のガータア蛇とよく似て居るが、それは蛇ではなくて蜥蜴であるから、書物の上では、蜥蜴の部類に入れてある。蛇は脚のない蜥蜴である。だから脚の無い蜥蜴を見ると、吾々は直ぐそれを蛇と呼び、脚のある蛇を見ると、蜥蜴と呼ぶのである。ガラス蛇には四肢があるから蜥蜴である。但しその四つの脚は體內にあるので、外からは見えぬ。そこでガラス蛇は、蛇になりかけて居る蜥蜴である。吾々はガラス蛇に於いて、この變化を目の當りに見たのである。斯うにガラス蛇は、爬虫類の二つの種類を繋ぐ連鎖たるものである。脚は最早や不用とはなつたが

全く無くなるだけの時間を経て居らぬ。即ち廢退器官として存してゐるのである。蟒蛇やコンストリクトル(一種の蛇)の體には、小さいな爪のある後脚の遺物が残つて居る。

蛇には肺が一つしか無い。祖先には二つの肺があつたが、體が細いので、肺臓が二つ並ぶ餘裕がない。そこで一方の肺臓が細長く發達し、一つの方は棄てられてしまつた。しかし今も廢退器官として残つて居る。

鳥類の右の方の卵巢もこの通りで、今では左の卵巢のみで卵が出来て居る。卵巢は動物が卵を生産する器官であるが、殆んど全ての動物には、二つの肝臓があり、二つの肺臓があるように、左右二つの卵巢がある。然るに鳥の卵巢は何かの理由で、右の方のは少しも用をせず、唯だ廢退器官として存して居る。

人間を初め、多くの有脊椎動物の脚は、膝から踝くるぶしの間には二つの骨がある。即ち脛骨と腓骨である。然るに鳥類その他の有脊椎動物の脚には、唯だ一つの骨(脛骨)

があるだけで、腓骨の代りには、膝から踝に至る中途の邊りまで、副骨がついて居るだけである。鶏の脚には、この副骨は一寸氣がつかぬ。大きな骨は脛骨であつて副骨は廢退した腓骨なのである。

昆虫には普通、二對の翅がある。しかし蠅には一對しかない。後の翅は唯だ二つの瘤で間に合はつて居る。他の昆虫では、前翅は型ばかりなものもある。雄の蜚蠊ヒゲムシには二對の翅があつて、間々飛ぶ時に用ひるが、雄は全く飛ぶことはなく、翅は型ばかりである。蜜蜂と蟻の勞働階級では、卵巢は廢退器官である。牝牛には六本の乳腺があるが、乳の出るのは四つで、あとの二つは型のみである。ところが型ばかりの乳腺も、時として乳を出すことがある。支那の羊には、耳が全く廢退器官となつてゐる種類と、尾が縮まつて、觸はつて見ると、僅かに釘ほど高くなつて居る種類がある。尻尾の無い犬や猫にも、型ばかりの切株が残つて居る。また或る種の鶏には、鶏冠とくかと肉垂にくだんとが型ばかりなものがある。支那コーチン種は、距かちが殆んど無く

なつて居る。無角の牛や羊は、角のあるべき箇處に小さな瘤がよく出来る。時にはそれが脱落すると、また生える。

多くの植物では、花瓣や其他の花の部分が、廢退器官となつて居る。花瓣は美しい色彩によつて、昆虫を誘ふのが役目である。ところが或る植物では、この役目は雄蕊がやつて居る。また他の植物(例へば猩々木)では、この廣告掛りは花の近くにある葉がやつて居る。蒲公英の、花の外側の方の小花には皆な廢退した雄蕊がある。蔓性でなくなつた或る種の瓢箪の卷鬚まきつるも廢退器官である。

寄生動物や寄生植物は、大に退化してゐるのが常である。といふのは、自由獨立の生活をしてゐた頃の色の器官が、今は入用が無くなつた爲に廢退してゐるからである。此種の動植物は、大抵は多くの廢退器官をもつて居る。一角は極北に棲まふ鯨の一種であるが、齒が二本しかない。そして其二本の齒の一本は、前方に眞直ぐに延びて、長さ六呎乃至八呎もあり、敵を突き殺したり、氷に穴を明ける爲に用ひ

られて居る。今一本の方は廢退器官であつて、頭蓋骨から外に延びることはない。濠洲の袋鼠は、今では子供を袋に入れて居らぬ。そこで袋は退化して、たい腹の皮の皺になつて居る。

人間の謂ゆる智齒といふやつは、之れまた消滅しかけて居る器官であつて、遅くなつて生えるが、全く生えぬ人も多い。また多くの動物には、目の内側の隅に『第三の眼瞼』の遺物がある。人間も御多分に漏れず、他かの動物同様、この遺物を持つて居る。ところが鳥や龜やその他の動物では、この第三の眼瞼は、充分役に立つて居る。之は薄い膜であつて、普通の眼瞼が開いてゐる時にも、屢々眼球を掩ふてゐることがある。人間でも類人猿でも、尾は廢退器官であつて、唯だ三つか四つの脊椎骨から成つて居る。ところが是等の動物が生まれる前には、長い尾があつて、尾を動かす筋もある。鳥類の尾も、今では單に昔の型が残つて居るだけである。岩石中の化石に残つてゐる最も古るい鳥類には、二十の脊椎骨から成る長い尾があ

廢退的の構造は、到るところにあるが、要するにすべての有機體進化の副産物である。之と同じく人間の心にも、その他の動物の心には、廢退的の本能がある。そして人間社會の法律にも、習慣にも、制度にも、同じく廢退的のものがあつた。今日の政治上、産業上、宗教上、教育上、法律上の制度には、到るところ廢退的の性質が満ちてゐる。之は一大問題である。そして若し諸君が、私が與へようとしてゐる鍵を握つたなら、諸君は今日理解することの出來ぬ多くの秘密を、理解し得るに相違ない。

〔廢退本能〕 不用になつた器官が人間や動物の身體に残つてゐるやうに、不用になつた本能も、人間や動物の心に残つて居る。生物はその身體の形や構造ばかりでなく、其性質や行動の仕方までも、環境に適合してゐるのが常である。動物は生きてゆく爲に必要な器官や、身體の色々な部分を備へて居るばかりでなく、同じく活

きてゆく爲に必要な行動を取らしめるやうな本能をも備へて居る。すべての生物は其性質のうちに、その生物を驅つて何事かを爲さしめるやうな衝動をもつて居る。そして此種の衝動は、概して有用なものである。然るにこの動物の種が、生存の闘争の結果として、從來の環境から異つた環境に追ひこまれた場合には、或る種の本能や行動のし方は、新しい環境の下では必要がないことになる。そしてこれ等の無用となつた本能が、即ち廢退本能である。

斯やうに廢退本能とは、生存闘争の結果として境遇が變つた爲に、不用となつた本能であつて、人間にしても其他の動物にしても、無用の器官を持つて居るのと同じやうに、無用の行動方法を澤山に持つて居る。斯やうな行動方法は、過去の精力の結果として今尙ほ残つて居るものであつて、蝨狀突起や岩窟内の魚の目と同じく、全く無用に歸しては居るが、尙ほ消滅しないものである。

家畜化された動物は、環境に非常な變化を受けて居るので、無用となつた本能を

澤山に持つてゐるのが常例である。これ等の本能は、従前の環境から新しい環境のうち
に持越されたものであるから、斯のような本能を發達した野生的の境遇に照らし
て見なければ、理解することが出来ぬ。言葉を換へて云へば、これ等の本能は、幾
世紀間の人間の淘汰が除去し得なかつた殘存物である。森や山や平原で、敵に取圍
まれ、狼のような缺乏に追はれてゐた野生的の生活では、これ等の本能は個體の爲
にも種の爲にも必要だつたのである。しかし人間の造つた人爲的の境遇の下ではそ
れは無用なばかりでなく、往々にして有害なものとなる。

本講では主として、家畜化された動物に残つてゐる、廢退本能の話をし、第四講
と第五講に至つて、人間の廢退本能を研究しようと思ふ。

【犬に残つてゐる野生の遺物】 私は犬に見られる四つの廢退本能を述べて見る。
即ち狩獵の本能、羊を殺す本能、横臥する前にぐる／＼廻はる本能、それから吠え
る本能である。

犬は滿腹して居る時でも、何が獲物を捜し廻はるものである。試みに最も柔なし
いコーリー種をつれて散歩して見ると、決して人の後とからついても來ず、また人
と並んで歩るきもせぬ。そこら邊りを嗅ぎ廻はつたり、叢の中や土手の岸などを捜
し歩るいて、何か物を見附け出そうとする。若し何物をか見附けると、必ずそれを
追ひかけ、出來得れば命を取る。小羊にしろ犢にしろ、決して斯んな眞似はせぬ。
犬は修養をした狼である。その先祖は兎や、小鳥や、羊や其他の動物を食物とし
た。彼等は是等の動物を狩り立て、その鋭い齒で引裂いたのである。しかし犬は
今では食器の物を食つて居る。彼等は先祖が狩獵者だつたので、今も狩獵をする。
彼等は今、人間の間に平和な生活をして居つては、全く必要のない本能を滿たす爲
に狩獵をするのである。であるから犬の狩獵本能は、不用となつた(獵犬以外には)
が、しかしまだ消滅はせぬ本能なのである。

コーリーは牧羊に用ひる犬である。彼等は人間と一緒になつてからは、任された

羊を愛護するように變化はしたか、それでも何うかしたはずみには、この柔なしい動物が、羊殺しを戯れにすることがある。彼等は殺した羊の肉を食ふでもなく、血を飲むのでもない、彼等は唯だ、頸動脈を咬み切つてうつちやつておく。そこで羊は、出血の爲に斃れるのである。コーリーは飢えてゐる爲に、羊を殺すのではなくたゞ演習の爲に殺すのである。それは自分の天性の車輪が、或る方向に回はつてゐて、止めることが出来ぬから殺すのである。殺さうとする衝動は、狼の場合には非常に強大であるが、コーリーの場合には、久しく用ひぬので弱くなつて居る。しかし時として、この古い本能が犬を支配する。そして此瞬間には、それは再び狼に復へつて居るのである。

犬が之から臥かようとするところを見てゐると、曾て野生時代に、生ひ茂つた草の中に寢床を造つた慣習が現はれる、犬は準備をせずに、いきなり臥るものではない彼等は之から臥ようとする場所で、一度か二度、必ずぐる／＼廻つた上で初めて臥

るのである。デアキンは曾て、犬が臥る前に二十回もぐる／＼舞ひをするのを見た
と云つて居る。之は狼が寢床を造る昔の所作が残つて居るのであつて、狼は寢場所
を造る爲に草を踏みつける。この習慣は、平原に寢床を造るには有用であるが、床
の上や藪の上に寝る今日には、詰らぬ暇潰しに過ぎぬ。

犬は吠えるのが普通であるが、時たまには氣味の悪い長咆えをする、吠えるこ
とは家畜化の産物であつて、狼は吠えないで長咆えをする。一匹の狼が小山の頂に
立つて、大きく長く咆えると、幾哩もの遠方で他かの狼が應答する。斯うして彼等
は、互ひに所在を知るのである。犬は時として、この古い習慣を出す。私は數年前
カンサス州の平原で、コイオート狼が夜間、小山の頂で咆えるのを聞いたことがあ
る。私の家にはネルといふ犬がゐた。平素ネルは優さしい聲で吠えるのだが、コイ
オートの遠吠えを聞くと、彼女は吠えるのをやめて、時としては長く引いた吠え方
をする。その聲はまるきり平素の吠え方とは違つてゐて、薄氣味が悪い。之が『野

生の呼び聲』である。久しい前には、彼女とその友達とは、こんなにして、互ひに呼び交はしてゐたものである。家畜化して幾時代を経た今日、彼女は尙ほ野生の昔の、絶えて永しい生活を忘れずにゐたのである。迷信家は、犬が長咆えをすると、一家に不幸がある前兆だと云つて居る。しかし斯ういふ人々はまた、過去の遺物——人間が何も彼も、前兆や縁起で説明して居つた、科學以前の遺物——を示して居るのである。百年ばかり前には、化學にせよ物理學にせよ、其他吾々が今日見るよ
うな、科學は一般に出来てゐなかつた。すべての場所を通じて働いてゐる自然の法則といつたようなものは、夢想だもしなかつた。そこで當時は、人には何も彼も、夢や前兆や縁起で説明したのである。そして斯うな古るい科學以前の考へ方は、今も尙ほ、すべての文明人の間に随分残つて居る。

【猫に残つてゐる野生の遺物】 家畜の猫は、野生の猫から來たものである。諸君が注意して猫を見るならば、過去の野生生活から來てゐる、多くの習慣に氣が附く

だらう。

犬は獲物を追つ掛ける。之はすべての犬屬——狼、狐、豺、それから飼ひ犬、みな同じことである。ところが猫の一屬が、獲物を取るのとは異つてゐる。彼等は獲物に近づくまで潜んでゆく。そして跳り掛かるのである。すべての猫——獅子、虎、豹、野猫、それから飼ひ猫、みな同じである。猫は忍び寄つて獲物を取り、犬は大抵追つ掛ける。

しかし飼ひ猫は犬と同じく、食器から食つてゐる。彼等の多くは、恐らくは一月に一回位のみしか、獲物を捕へる本能を満すべき機會はない。けれども昔の仕方では獲物を捕る本能は、家畜化された猫にも残つて居る。彼等は少しばかり忍び寄つては何か捕るかのように跳り掛つて見る。それはバツタのこともある。または蠅のこともある。ことによると何にも無いこともある。彼等は唯だ、古い用ひぬ本能の練習をしてゐるだけなのである。

猫は樹や柱などのところへ往つて、爪を磨いたり、驅け登つたりする癖がある。之は手足の筋肉の不安と倦怠とを醫する爲めである。即ち脾肉の歎があるからである。野生の猫はよく樹に登つたり、引掻いたり、爪で物を握る。猫の爪は犬の爪とは違つて居り、出したり引込めたりすることが出来る。斯うな爪の運動は、筋によつて爲されるものであるが、久しく用ひないであると一種の不安と倦怠を感じる之は雨降りなどに、終日吾々が家の中に閉ぢ込められてゐる時、一種の不安と倦怠を感じるのと同じことである。そこが猫が樹で爪を磨くのは、曾てその祖先らが、狩獵や樹登りの爲に毎日用ひてゐた筋肉の演習をしてゐるのであつて、これは家畜化した猫には、或る程度までは不用となつて居り、従つてその程度では廢退的本能となつて居るのである。

序でに言つておくが、猫と犬との間には、心理状態の上に一つの差異がある。

といふのは、犬は人になづむ性質をもつて居る。だから一家が引越すと、犬も一緒に引越してゆく。彼れは乞食の飼主にでも、暑い日にも寒い日にも、飢餓を忍んでも、主の跡とに隨いてゆく。犬の人間に對するのと同じように愉快げに愛着は、この世の中の最も美しいもの、一であつて、迷ひ兒になつた犬ほど可哀相なものはない。犬は何人かに屬しようとする。

猫は人よりも場所になづむ。猫はその愛着と忠信とを、ある場所に注ぐものである。猫には家に對する強い本能がある。そして人間の持つて居らぬ感覺を備へて居るので、之によつて間違ひなく家に歸つて來る。彼等は途中で少しも外とを見せぬようにして、數哩も隔つた所へ持つて往つても、不思議に歸つて來る。犬も幾らか此通りのことをするが、猫の方は人間には全然お構ひなしで、唯だ自分の住み慣れた場所に執着するのである。

家に歸る本能が一層發達して居るのは傳書鳩である。傳書鳩は家に對する愛着が強いので、數千哩も隔つた所に移しても、放されると三四回輪を描いて空を飛んだ

後ち、直ぐ故郷の方向へ飛んでゆく。

野生の動物は當て途もなく漂らひ歩いて居るかのようになり、一般に想像せられて居るが、之は間違ひである。彼等は多くは、一定の場所に棲まつて居る。彼等は親や仲間から、その場所の勝手を學ぶから、知らぬ他郷に漂らふより、住み慣れた場所に居る方が安全なのである。家に歸る本能は、この本能を持つてゐるすべての動物に取つて有用なものである。之は蟻でも鳥でも、猫でも同じことである。しかし此の本能は、海外輸出の爲に猫を飼つてゐる家に生まれて來た猫には無用である。

犬の先祖は、猫の先祖に比らべると、もつと漂浪の習慣をもつてゐた。そこで今日でも、猫の方が多く家に愛着するのは其爲めでもある。しかし犬が人間に愛着するのは、家畜化されてから長い歳月を経て居るからであつて、犬はこの間、絶えず忠實とか智力とかを標準として淘汰せられたが、猫はそうではないのである。猫は他の動物に優さつて人間の伴侶とせられて來たが、飼は元々、鼠や廿日鼠や、其他

の人間の住居に侵入する小動物を捕へる爲に飼はれたものである。

【母の本能】 人間でも其通りであるが、すべての動物の一生涯で、一番死亡率の高いのは子供の間である。生物の幼年者は、最も弱い時期であり、多くの敵に對して己れを防禦する力が、最も乏しい時期である。そこで多くの高等動物、ことに鼠の女性には、子供をいたはり、親に對して子供を防禦する強い傾向が發達して居る。そして子供を保存する斯ような本能の最も發達してゐる種が、生き残つたのである。その子供を愛護せぬ種は、固より長く存続することは出來ぬ。

飼ひ牛は産んだ仔を匿くす。これは固より、牧場では無用のことである。けれども幾百といふ飢えた口が、生まれる犢を待つてゐる危険に満ちた過去の生活では、母親が仔を産むと、どこか秘密な場所に隠れることは、必要なことだつたのである。

飼ひ鳥もこれと同じ理由で、その巢を匿くす。七面鳥や珠鳥はなぐりてんのような、最近に飼

ひ馴らされた鳥類は、鶏などのように、早くから飼ひ馴らされてゐた鳥類に比してこの本能は一層強い。現に或種の鶏には、この本能は殆んど残つて居らぬらしい。無論どちらかと云へば、隠れた場所に巢のある方を好みはするが、何處までも巢が造つてさへあれば、公然と平氣で卵を産む。鶯鳥は一層注意深く、餌を食ふ爲に巢を掩ふておく、しかし考へて見ると、人の見て居る目の前で巢を出ておいて、跡から草や小枝を拾つて態々卵を掩ふといふことは、如何にも馬鹿げたことである。けれども野生生活のうちに回はつてゐた本能の車輪は、遽かに止めることが出来ぬ。そこでその必要の全く無くなつた今日までも、この車輪は、依然として回轉して居るのである。しかし時によると、鶯鳥は實際に卵を匿さないで、唯だ少しばかりの藁・小枝かを卵の上に載つけるか、それとも遠方から卵の方向に、藁か小枝かを投げるだけのことがある。此場合には、右の本能は大に弱められて居るのである。

野生の兎は、自分の體の毛を抜いて巢を造るが、飼ひ兎は綿や其他の材料を與へ

られて居るにも拘らず、矢張りそうするのである。

禽類や牝牛の斯ような母の本能は、卵や子供が敵からつけ狙はれてゐる場合には必要な本能であるか、人間の畑や納屋では、廢退本能である。是等の本能は、無用なばかりでなく、往々にして有害である。例へば牝牛が仔を匿した爲に、飼主が知つた時には寒さや雨で死んでゐることがある。飼ひ馴らされた動物は、色々な點で尙ほ野生の世界に適應してゐるから、現に環境は變つても、矢張り過去の環境のうちでやる通りのことをやるのである。人間と一緒に生活してゐる動物は、人間と協力した方が概して利益である。それにも拘らず、彼等の性質には、野生時代から残つて居る多くの本能があつて、その爲に人間に對して敵意をもつた行動を取らしめる。しかし時の経過するにつれ、斯ような反對的の本能は段々弱くなり、遂には全く消滅するだらう。何故ならば人間は、最もよく人間に都合のよいものを選んだ淘汰を行ふからである。

馬にせよ、牛にせよ、羊でも豚でも其他かの家畜でも、子供を産んだ時には、不思議なほど猛悪になるのが常である。彼等は子供に近づくものは、何でも襲撃を加へる傾きがある。斯ような子供を保護する本能は、家畜には両親共にあるが、殊に母親に強烈である。是等の本能は、今は大部分無用に歸しては居るが、曾ては種の保存の爲に必要であつた時代を経過して來たので、今も尙ほ残つて居るのである。

【母の愛】 母の愛は、人間の發明ではなくて、譲り受けたものである。それは富士山よりも古るい。人間の母の愛は、人間の脊骨と同じ由來を持つて居る——即ち人間前の形態から來たものである。人間にある母の愛は、鳥や獸にある母の愛と、全たく同じものである。母猿は、人間の母親と殆んど違はぬ慈愛をもつて、その子供を愛する。子供が死ぬると、母親は幾日間も、具死骸を肌身放さず持ち歩るいて食物すらも取らず、默然として悲歎に暮れて居ることも屢々である。母鳥も子供の爲には、一身をも犠牲にする。熊でも、獅子でも、鯨でも、その他の動物でも其通

りである。

子供を保護する斯ような本能が、普通に種屬中の弱者たる女性の間には、斯くも一般に植え附けられたのは、抑々何故であらうか。少くとも有脊椎動物では、雄は雌よりも大きく、且つ力も強く、斯ような保護の役目をするのは、肉體的に雄よりも一層適して居る。自然は何故に、この任務を雄に與へなかつたらう。自然は過つてこの本能を、不適當な女性の胸に植え附けたのであらうか。

母親が父親よりも子供を可愛がるのは、身を分けたからだとは、よく云ふことである。之は全くの嘘である。人類間の母の愛が父の愛より強いのは、母鳥や母熊の子供に對する愛が父鳥や父熊より強いのと同じ理由によるものである。母親が子供に對して一層強い愛情をもつて居るのは、人間以前の動物に初まつて居り、人間は唯だ之を承け繼いだゞけである。

この本能が初めて生じた野生時代には、子供の産まれる時分に其場に居るのは母

親だけである。従つて母親は、この本能を植え附けることの出来る唯一の親なのである。そこでこの本能を全然誰れにも植え附けぬより、種属中の弱者にでも植え附けた方がましなのである。動物界の雌雄関係が、何時でも、今日人間の間に行はれてゐる通りであつて、何時でも一人の父親と一人の母親とのある家族があつたのなら、成る程、子供を保護する本能は、主として雄に發達したに相違ない。之は疑ひの餘地のないことで、全ての動物みな其通りであつて、人間もそうだつたに違ひない。

現に或る魚類では、子供の世話や心配は、一切萬事雄が引受けて居るものがある。そして鳥類のうちでも、少くとも一二の種属では、同じくそうなのである。駝鳥は雄が卵を孵したり、雛の世話をする。とげ魚の卵や子供の一番の敵は母親である。彼女は子供に少しの愛情をも持つて居らぬばかりか、若し父親が妨げなかつたなら卵をも子供をも、皆んな食つてしまふのである。母親が幾らかでも、卵や子供の世

話を見るのは、魚類のうちではほんの僅かの種属だけである。そこで魚類の間では子供を保護する本能は、人間や其他の高等動物の場合のように「母の本能」ではなくて、「父の本能」なのである。

動物のうちで、一生涯夫婦関係を續ける種属は、(鳥類にせよ人間にせよ)すべて永久的の家族関係のない他の動物に較べて、親の愛が平等に雌雄間に分たれて居るのである。子供に對する親の愛は、種属を保存する爲に自然が備へたものである。この愛が男親にあるか、又は母親にあるか、それとも兩た親にあるかは、それはこの種属と其祖先とを圍繞してゐた境遇によつて極まるのである。

時を経て、社會が益々子供の世話をするようにすれば、自分の子供に對する親の愛は、大に弱くなるに相違ない。その代り親には、子供全體に對する愛情が大に發達する。そして今日世間の親達が、自分の子供に持つてゐる依怙最負の感情がなくなるに相違ない。社會は子供の世話をする上には、一人々々の親よりも、色々の點

で遙かに優つて居る。今日でも社會は、子供の教育を行ひ、學校や教師や、或る場合には書物や食事の世話までしてゐるから、曾ては是等のことは、みな親達の手で『公けに』ではなく『私に』やつてゐたのである。將來の社會は、この方向に一層進んでゆくに相違ない。吾々は變化と發達の世界に住んで居る。若し吾々が一千年の後に、再びこの世界に歸つて來ることが出來たなら、この世界は全るで見違へるようになつて居るだらう。そこには新しい風習、新しい言語、新しい國民、新しい産業形式の違つた教育、違つた社會關係、そして一般に違つた思想が行はれて居るだらう。吾々はともすれば、物事は將來も大體今のまゝで居るかのやうに臆斷し易いが之は間違つて居る。今日吾々の見慣れて居る物事は、多くは今から千年か二千年のうちに消滅するだらう。現在とは、唯だ事物の移りゆく一形相に過ぎぬ。

【指導者の模倣】 私の一家が田舎に住まつてゐるころ、父は羊を飼つてゐた。そこで羊の心理状態について、今に忘れられぬ面白いことがある。

羊は夜は檻に入れ、晝間は放牧地に出すのであつたが、檻の入口には戸がなく唯だ何本かの門が入れてあり。そして羊の出入りには門を外づすのであるが、早く出たいので、羊は時としては門を悉く外づすのが待ちきれぬことがある。そんな時には、一番先になつてゐる羊は先づ門を飛び越える。そこで後との羊も同じく飛び越える。彼れ是れするうちには、門は全部外づされるが、最早や障礙物はないにも拘らず、残りの羊は悉く、その場所に往くと前の羊の眞似をして何も無い所を飛び越える。

この模倣の本能は過去の遺物であつて、今日の開化した羊の生活状態とは異つた境遇のうちに發生したものである。

羊は山地の住民である。彼等の本國は高地である。彼等は家畜化される以前には群團を爲して生活して居つた。そして各々の群團は、經驗に富み、且つ勇氣のある年寄りの牡羊に指導されてゐた。これ等の群團は、屢々狼や其他の動物に襲はれた

が、こんな場合には全群團の運命は、巧みに且つ忠實に、指導者の行動を模倣するや否やかで極まることが多かつた。そこで羊が其の指導者を模倣する習慣は、追ひかけられた場合、先頭に立つ指導者が岩の裂け目を飛び躓えれば、理由は知れないまでも、後に隨ふものは同じ場所で飛び躓えるといふ必要から生じたことは疑ひがない。そして之を能くしたものは生き永らへ、能くしなかつたものは滅亡したのである。

であるから模倣の本能は、野生の羊のような生活状態にあつては必要なものであるが、今日の如く低地の住民となつては、無用の本能である。指導者に従ふ本能は群團生活をしてゐる全ての動物にあるが、彼等の多くに取つては有益なものである。

シカゴの屠獸所では、斯ような模倣の本能を利用して、羊を屠所に引入れる爲に老いた牡羊を用ひて居る、即ちよく仕込んだ牡羊が先頭に立つて、羊を屠所の入口

までつれて來ると、牡羊をかわして仕舞ふのである。これは指導者に従ふ本能が利用せられてゐる一例であるが、それは羊の爲に利用されてゐるのではなくて、人間の利益の爲に利用されて居るのである。豚や牛にはこの本能はない。だから彼等を屠所に入れるには、引張つたり鞭つたりしななければならぬ。

【自然の學校】 若い羊や山羊は、よく飛んだり跳ねたりする。私は街を引張つてゆく若い山羊を見たが、歩ゆんでゐるうちにも、折々飛び上がる。或は右へ或は左へ、時には又空を目懸けて垂直に飛び上がるのを見てゐると、恰も彼等の體内に目に見えぬ發條はねでもあつて、それが俄に弾けるかの如くである。斯ういふ所作は、ダアキン以前の人々には如何にも不可思議に見えたが、今日の進化論學者に取つては平凡極まる現象に過ぎぬ。

遊戯は自然の學校である。それは來るべき將來の生活の準備である。幼い動物は遊戯をしながら、その後大きくなつてから爲さんとすることを練習するのである。

これは動物全體を通じての眞理であつて、人間の子どもまたこの例に洩れぬ。小羊が馳けたり飛んだりして遊ぶのは、人間や、犬や、獅子の子どもが互に取り組み合つたり、喧嘩をしたり、ちやれつき合つたりすると、少しも道理の異なることはない機會のある毎に、小羊は峻しい堤や傾斜面を彼等の遊び場に選ぶ。堤は山腹の模擬である。

小羊は山羊の子孫である。彼等の天性は、今日の生活とは遙かに異つた生活に適合するように造られて居る。彼等は山中生活に適合するように教育せられて居る。彼等の遊戯の跳躍や疾走は、元來は、すべて彼等が成長してからする生活に必要な準備であつたのである。それは速く走り、遠く飛べるように彼等の筋肉の力を發達させ、また確實に身を支へ、滑ることなくして岩石につかまり得るように、彼等に熟練をさせた。然し彼等の教育は今では時代後れになつた。小羊の遊戯は、人間の子供の遊戯と同様に、遠い過去の生活の準備である。人間の子供の遊戯は、吾々の

蒙昧時代の先祖の行つた闘争生活の準備であり、小羊の遊戯は、彼等の野生の先祖がやつてゐた敵に取巻かれた山中生活の準備である。山羊が遊戯をするのは、學校へ行くことである。彼等は將來、實際生活に於いて行はんとすることを行ひつゝ、課業を學ぶのである。然し飼養せられてゐる山羊の生活状態は、野生の先祖のそれとは全く一變したので、彼等の學校教育は時代後れとなつたのである。彼等は最早や子供の時代に學ぶ學課を決して實際生活に用ゐることはない。山羊教育は、他の多くの動物の教育の如く、時代後れである。

【蒼空の子供】 山羊や緬羊は元來山嶽の住民である。彼等の先祖は、低地の飢ゑを渴えた動物に追はれて、深い山奥に棲息して居つた。家畜の山羊は多くは低地の住民である。そこで諸君が彼等を注意して見ると、若し岩山の住民の子孫でなかつたら、決して今日やりさうにもない多くの事柄をすることに氣がつくであらう。山羊が材木の堆積や、乾草の堆積や、低い建物の屋根などに登りたがる癖は、世界の頂

上に於けるそのもとの住家から、平野へ下る際に持つて来た特性である。乾草の堆積は山の絶頂であつて、蒼空の子供たるこの山羊が、そこから世界を瞰下ろすことが出来るのである。それは彼等が展望臺である。

苟くも拾ひ得るものなら殆んど何を食つても生きて行ける山羊の能力も、彼等が無慈悲な低地の動物に追ひ込まれてゐた、荒涼たる不毛の高地に於いて發達させた技術の一つである。山羊がその種族的存在の一部を送り、且つその神経的筋肉的組織の基礎を作つたのは、斯ような實際の砂漠であつた。即ち彼等は、斯ような場で製造せられたものである。

山羊は新聞や襤褸を慰みに食ふのではない。彼はそれを消化する。紙は木材で出来て居り、襤褸は化學的に木材と同質な綿の纖維で出来てゐる。すべての木材の纖維の主要部分は、纖維素と名ける物質である。纖維素は化學的に澱粉と同じ物である。そして消化せられると砂糖になるといふ事實に於いても、纖維素は澱粉に似て

ゐる。吾々は、纖維素に硫酸を注いで、試験管の中で溶かすことが出来る。試みに新聞紙の破片に硫酸をかけると、それは變じて砂糖となる、然し吾々は消化液の中に適當な化學的藥品を持つてゐないから、體內で纖維を消化することは出来ぬ。けれども山羊には出来るのである。山羊は四つの胃袋を持つてゐる。山羊は謂ゆる反芻動物である。反芻動物はすべて四室から成る胃袋を持つてゐる。そこで彼等はその献立表に、人間の如き動物が省略せねばならぬ、多くの物をも包含することが出来る。

空中に生れた生物に取つて、低地は如何に平凡に見えたことであらう。その生活を平野で送らなければならぬ空中の子供は、如何にその古里の岩山を戀ひ慕ふことであらう。昔バビロンの國王は、その故郷の山々に對する思慕禁じ難く、メヂヤ出身の妻君を養つて置く爲に、不思議な吊庭や人工的な高地を築いたといふことである。

吾々の心の飢ゑは、如何に多く過去に根ざしてゐることであらう。それは既に、後に残して來た生活からの遺物である。吾々は過去つた幾世紀を貫通した針金で操つられてゐる。像に過ぎぬ。吾々は互に重なり合つてゐる影法師の連続である。鞞や、樹攀りや、鳥の巢荒らしに對する子供の愛慾、野生に對する一般人の熱情は、吾々が最近にやめた古い、野生的な、樹上生活の遺物である。搖籃や搖椅子は人工的な梢である。若しも吾々の大昔の先祖が樹上生活者でなかつたならば、彼等はそ
の天性の中に、決して是等の物の發明を呼び起すような性質を持たぬから、人間は決して斯ような事を發明しなかつたに相違ない。

【鶏の習慣】 鶏の先祖は印度のやぶとりである。この鳥は色は茶褐で、灌木の叢に眠り、每晚同じ場所に棲る。それは地上に巢を作り、雌鳥が卵を生むと、コッコツコツと鳴く習慣——鳥には寧ろ珍しい習慣——がある。一夫多妻主義が行はれてゐる。雄鳥は極めて喧嘩好きで、人里に住んでゐる彼等の子孫が、今日世界中です

るように、夜明けに唄ふ習慣がある。

飼鶏には、彼等の先祖の風習を知らねば理解し難い多くの所作がある。斯ような所作は、正しく廢退的なものとばかりは云はれない。それは無用なものではなくて、その多くは、若し鶏が常に今日の如き生活状態に生活してゐたならば、恐らくは決して生じなかつたに相違ないものである。野生の鶏(やぶとり)はそれが役に立つたから、之を持つてゐたのである。飼鶏は、單にそれを受け継いだから之を持つてゐるのである。

大抵の鳥は木の枝に巢をつくるが、鶏は地上に巢を作る。彼等はその先祖の足跡に従いて行つてゐる。家鴨や鵝鳥は地上に眠るが、鶏は、木の枝に眠る。尤もそれは本統の木の枝もあるし、人工的なものもあるが。鶏には又やぶとりのように每晚同一の場所に眠る習慣がある。雛鳥を捕へて二三度一定の場所に棲らせると、その後には彼等自身で其處へ棲るようになる。

家禽の雌鶏はその巢を匿す。彼女にはまた卵を生むとコケツコッコと聲を擧げて之を知らせる習慣がある。一見この二つの本能は、實際に於いて互に効果が相反するかのである。そして實際今日ではさうなのである。然し吾々は飼養動物の本能の説明を求める場合には、是等の本能は大抵、今日彼等を圍繞する境遇とは遙かに異つた境遇の下に、彼等の天性に植付けられたものであると云ふことを記憶せねばならぬ。地球上に人間のような知慧のある生物が未だ現はれない以前、雌鶏は野生の鳥としてその卵を秘密の巢の中に生産、且つコケツコッコと鳴いたのである。

雌鶏が巢を出る時に矢鱈に走りまはつたり、コケツコッコと鳴いたりするのは、彼女が狐を巢から反対の方角へ誘き寄せる詭計だと、昔から想像されてゐる。狐は雌鶏の後を追うて巢を忘れて了ふ。鳩や鷓鴣は、彼等の巢の近邊から敵を遠ざける爲に、斯ような種類の詭計を用ゐる。そしてこの事は恐らく、雌鶏が巢につい

てゐて驚かされた時に、騒々しい羽音を立て、飛ぶ理由の説明ともなるであらう。

雌鶏が驚かされた時に仰々しくするコケツコッコの鳴聲と飛ぶ羽音とは、彼女が卵を産んだ後でする普通の鳴聲とは恐らく異つた所作であらう。私の見る所によると、雌鶏がコケツコッコと聲を立てると雄鶏も亦コケツコウと鳴く。そしてこの合奏は野生状態に於いては、二羽のものが互にそのありかを知らせる目的を有するものであるらしい。野鶏は各々、一羽の雄と數羽の雌とより成る家族生活をしてゐる雄はその妻君連に對して非常に妬み深く、且つ尊大である。彼は彼女等の自からなる主君であり、保護者であると自ら考へてゐる。彼の家族の一員がその巢に就いて、それから鳴聲で以て最早彼女は皆んなと一緒になつてもいゝと云ふことを知らせると、雄鶏はその鳴聲で之に應答して、家族一同は今何處にゐるか（屢々その間には相當の距離のあることがある）を彼女に知らせる。私の目撃した所によると、雄鶏は斯ような場合には幾らか神経的であり、且つ氣遣はしげであつて、一般に隣り近

所の家族のものに對してではなく、彼自身の家族のものに對してのみ、コケツコウの聲を立てるようである。

【未來の奇蹟】 最も進歩した鶏の種類では、野生の先祖に於いてかくまで強い巢を隠す本能を、殆んど全く失つて居る。彼等はまたその産卵を、一年間の四季に擴張させた。家禽だつて鳥には相違ないから、野生状態に於いては、春になると一と腹の卵を産んで、之を孵化させたら、もう來春までは産卵せぬ野生の鳥の共通の習慣を有してゐる。然るに淘汰によつて、絶えず産卵する種類が出來たのである。

牝牛も同一方法によつて産乳期を延長させられた。若し吾々が絶えず人工的に雌鶏に卵を孵化させ、且つ繁殖の目的で、より多く産卵する雌鶏を選択して行くと、暫くの後には吾々は、年中絶えず産卵するばかりで、卵を抱へたり、コッコと雛を呼んだり、腹に抱へたりしない雌鶏を作り出すことが出來るであらう。又た産乳の機能だけあつて、母となる行爲をせぬ牝牛をも作り出すことも出來るであらう。

動植物共に、飼養中の人工淘汰は、まだその未熟期にある。豫言者の精神を有する人々のみが、この地球上にこれから明け渡る時代に於いて、人間が自分自身の上に、また人間と一緒に住まつてゐる動植物の上に、屹度行ふ奇蹟をも夢み得るのである。人間は既に棘のない霸王精しゅほうせいや、緑色の薔薇や、種のない蜜柑や、林檎や、葡萄や、バナナやバインナプルを作つた。そして若しも彼がそれを望み、それに心を寄せるならば、彼れは彈石位な大きさの芥子や、絹のような毛を有する緬羊や、年中クリームを出して呉れる外何もしない牝牛を作り出すことが出來る。

【斷崖に棲まふ鳥】 鳩を知らぬ人は滅多に無からうが、然し知つてゐる人の中で果して幾人が、何故この鳥は鳥類が普通するように、木の枝にとまつたりその巢を木の枝に作らないで、人間が拵へる人工的な箱の中に入るのかと云ふことを考へたであらうか。

飼鳩には約二百の變種がある。彼等はすべて歐羅巴の海岸の斷崖にその巢を作る

岩鳩といふ鳥の子孫である。岩鳩は木に棲る鳥ではない。それは岩に棲り、岩の割目に巢を作る。飼鳩がその巢を人間製の洞穴に作るのは、その先祖が断崖居住者でその巢を岩の割目に作つたからである。それが樹木よりか家の棟を好むのは、家の棟又は破風は樹木よりか好ましい断崖であるからである。

若し鳩が歐羅巴でなくして亞米利加で飼養せられたのであつたならば、それは北亞米利加東部の森林に澤山棲まつてゐた、所謂渡鳩と稱せられる野生の鳩をその先祖としてゐたであらう。さうすると、それは木に棲る鳥であり、今日吾々の市街や百姓の庭の人工的な箱などに棲まつてゐる、クウクウ鳴く洞穴居住者とは餘程異つた鳥であつたらう。それは巢を木の枝に作り、木の枝に眠り、そして移住の本能を有してゐたであらう。岩鳩は渡鳥ではないから、従つて飼鳩には移住の傾向がない然し若しそれが歐羅巴鳩からではなくて、亞米利加の野生鳩から出たのであつたならば、恐らくそれは移住本能を有し、又恐らく鵝鳥や家鴨と同様に、秋になつても

それを逃がさないで置く爲に、飛べなくする必要があつたであらう。

【豚の野性】 家畜の豚は歐羅巴の野猪少くともその西部の種屬から出たものである。支那及び東洋の豚は、恐らく種の異つてゐる印度の山豚から出たものらしい。野生状態にあつては、是等の動物は小さい群又は社會をなして棲息し、草木の根や球莖を喰ひ、そして是等のものをその短くして力の強い鼻で掘つて取つたのである。野豚はその家族關係に於いては一夫多妻である。その餘り遠くない親類の犀のように、彼等は沼好きの動物であつて、軟い泥土の中に始終浸つてゐたり轉び廻つたり、また日向で駄眠を貪つたり冥想に耽つたりする。不注意から危険に臨んだ時には、彼等は互に忠義を表はす。若しも警報の悲鳴が群の一つから發せられると、群全體が災難に陥つてゐる一つを救はんが爲に、必要ならば、生命そのものを犠牲にする。彼等は剛毛を立て、荒まじい呻り聲を擧げて敵に向つて突撃する。母親と子供とが思ひがけない危険に脅かされた時には、子供は本能的に、ペタと路にへたばつて身

動きもしない一方、母親は勇往邁進してその難局に當るのである。

そして豚を知つてゐる程の人は誰でも、是等の本能は、檻に棲まふようになつて以來多くは不必要なものにも拘らず、如何に忠實に家畜的種屬が先祖の本能を守つてゐるかを知つてゐる。私は子供の時分に、幼い豚が、危険を含んだ何事かゝ起りさうな時には、無生物になる——ペタと地面へ平張つて、其處へ糊附けにされたように動かずに轉んでゐる——のを見ては、屢々不思議がつてゐた。

豚の剛毛と呻聲とは、人間の隈取又は喊聲である。多くの動物は戦ひに臨む場合に、彼等自身を出来るだけ恐しく見せることによつて、勝利の機會を多くしようとする。犬は呻つてその齒を示し、牡牛は吼へて土を蹴り、猫は脊を高くして唾を吐き、鵝鳥はガアツ、ガアツと鳴き、猩々は喚き且つその拳で胸を打つ。

誰でも豚のお氣に入りの活動——穴掘りと、泥濘の中の晝寝好きとを知らぬ者はない。生活の心配から解放せられて外に何もすることがない時には、豚は穴を掘り

山羊は跳ね廻り、犬と人間とは狩獵と鬭争とを事とする。これらはすべて野性の遺物の例である。豚は丁度人間や犬が狩獵と戦争に快樂を見出すと同様に、穴掘りに快樂と運動とを發見するのである。

【その他の廢退本能】 飼養せられてゐる鵝鳥はカナダの鵝鳥——春北へ向つてV字形を成して空を飛ぶ、野生の灰色の鵝鳥——の子孫である。野生の鵝鳥は渡鳥である。それは歐羅巴、亞細亞及び北亞米利加の北部で夏を過ごし、印度、埃及及び北亞米利加の熱帶地方で冬を過ごす。秋になつて時候が寒くなりかけると、世界の暖い方へ飛ぶように唆かす感情が湧いて来る。そして三四月頃になつて太陽が南から近づいて来て、北半球の空氣を暖めるようになると、鵝鳥には北方へ飛ぼうといふ共通の感情が湧いて来る。田舎で暮した少年時代に私は、野生の鵝鳥が春になるとよく空を飛んで、空中からガアツ、ガアツと鳴くと、飼つてある鵝鳥が興奮して鳴き交はし、そして時にはその翼をバタ／＼振りながら、皆んな走り出してゐたこ

とを想出す。それは野性の呼聲であつた。彼等は尙ほその天性の中に遺つてゐる覇氣を持ち、極地に對する舊い春の飢餓を持つてゐたけれども、如何せん、彼等はその欲望を遂げることの出来る飛翔力を持たなかつたのである。

水といふものに接することの出来ぬ家鴨は、乾いた砂の中で、その翼で水に浸つたり潜つたり跳ね飛ばしたする運動を濟ませてゐる。彼等の天性の組立は常に水があつた境遇で仕上げられたので、彼等は依然として、水の無い場所に於いてさへも水鳥の眞似をしてゐるのである。

驢馬と駱駝とは、何れも元來砂漠の動物なので、濡れることをひどく嫌ひ、馬は驚かされると一足飛びに走つて逃げ、蜜蜂は巢立ちすると飛去つて何處か自然的な棲家を捜し、野鶉は叢の中で餌をかき廻す習慣がついてゐるので、餌を遣ると、籠の底をヒツ搔きまはる。また龜は驚かされると、ポトリと水へ落ちるが、その時は彼等は實際の恐怖からではなくて、寧ろ機械的にさうすることは明らかな事實であ

る。

飼養動物の心理には、斯ような遺跡が無數にある。それは衰微状態にありながらも、吾々が生ける有機體に於いて遺傳と名づけてゐる所の宇宙の保守的傾向と呼應して尙持續してゐる。

第三講 文明人の起原

【本論の目的】 文明人はすべて蒙昧人から来た。彼等は丁度、一個人としての諸君や私が、赤ん坊から成長したように、蒙昧人から成長したものであつて、之を知ることが最も肝要である。何故かと云へば、文明人はただ蒙昧人を仕上げたものに過ぎぬといふことを認めぬ限りは、彼等が考へたり、感じたり、行つたりする——文明人のうちにも野蠻で奇體なのが多い——ことを理解し得ぬからである。

それから蒙昧人の性質や思想をあらまし知つておくことも肝要である。斯くて吾々自身の性質や思想と較らべて見て、そのうちのどれ丈けが蒙昧時代から残つて居るもので、どれ丈けが其の以後に生じたものか、知れるのである。

そこで本講の目的は、(一)文明人の祖先はすべて蒙昧人だといふこと、(二)どん

な種類のものか謂ゆる蒙昧人なのか、詳しく云へば、吾々の祖先はどんな動物だつたかといふことを諸君に教へることである。

【英國人は何處から来た?】 試みに三千年ばかり昔に立ち返るなら、諸君は世界ちうのどこにも、英國人を見なかつたらう。否な英國人ばかりではない、佛蘭西人にせよ、西班牙人にせよ、又は獨逸人にせよ、露西亞人にせよ、その通りである。

しかし諸君は、是等の近代人はいずれも、その當時は野蠻人であつて、それから近代人が出て来たのだといふことが解るだらう。英國人は、元をたゞせば、アングロ、サクソン、ユートの三種の野蠻人或は半野蠻人であつて、もとく、デンマーク地方及び南部歐羅巴地方に棲まつてゐたものだが。今から千四百年か千五百年前に此等の蠻族が、グレートブリテンの島に渡つて来て、そこに殖民したのである。その最初の殖民をしたのは、紀元四四九年である。

これ等の民族は、毛皮を纏ひ、冒險を好み、海を非常に愛してゐた。彼等は大抵

掠奪によつて生活をして居つた。ボートに乗込んで、バルチック海の沿岸を航海して、他の蠻族の部落へやつてくる。そこで彼等は、村の者を逐ひ出したり、殺戮したりして、全村に掠奪を行つて、遂には、その村を焼き拂つてしまふ。彼等はこんな行爲を正當だと思つてゐた。彼等は常に、「力の^{マイクスライ}ある所に權利あり」、實力さへあれば、何をして^{マイクスライ}もかまはぬといふ主義の下に、すべての事を行つてゐたのである。

英國人は世界中の何處へ行つても住まつてゐる。南北兩米にも、南アフリカ、濠洲、印度、亦何處の島嶼にも住まつてゐる。英國は、他のどの民族よりも、地球の眞の探險者であり移住者であつた。英國人は、その冒險的性質によつて、既に事實上、兩大陸のすべてを含む地球の表面の大部分を占めて居る。

英國人が斯ように不撓不休の活動をつづけた理由の一つは、たしかに彼等の祖先が海賊だつたといふ點にもある。若しも英國人が、歐羅巴の内地に棲むあの溫和な家族的な、平和な土民から起つたのだつたら、恐らく英國の歴史は、今日のそれと

は、非常に異つたものであつたらふ。成長し發達した大英國人も、丁度大人が、その子供時代に似てゐるように、單に未成品たる昔の性格を反映してゐるに過ぎないのである。

【其他の近代人は？】 佛蘭西人は羅馬帝國時代に、今の佛蘭西地方に散在してゐた、ゴールといふ野蠻人の後裔である。

獨逸人は、ゴート、ヴァンダル、シンプルの三野蠻人の子孫で、是等の蠻族は中部歐羅巴に棲んでゐて、羅馬帝國の侵略を助けてゐた。

伊太利人は、ローマ人の後裔で、ローマ人は、ラテン語を話し、キリストの時代及びその以後に、伊太利半島並ひに地中海地方に棲んでゐた。

ギリシヤ人は、昔のギリシヤ人の子孫である。

近代の白色人種、即ち露西亞人、獨逸人、佛蘭西人、英吉利人、瑞典人、亞米利加人などは、すべて共通の言語や傳説で、血統を溯つてみると、皆な大昔に、東方

即ちカスピヤ海の東から移住して来た人種から出てゐる事が分る。是等の民族は、今の歐羅巴の地に移住して、世の中にまだ成文の歴史などといふものない大昔に、そこに殖民した。そしてすべての近代の歐羅巴人は、是等の民族から出て来たのである。そこで吾々がずつと祖先に溯つて行くと、白人は皆な同一の蠻族から分岐したのだといふことが分るのである。

【人類の搖籃】 扱てしからは、是等の原始の白色人種は、何處から来たのだらふ。又た黒色人種は何處から来たのだらふか？ 又た支那人は何處から？ そして印度人は何處から？ 人間といふ種^{スペシイ}の搖籃は、一體何處だらふか？ 世界の何處か、又た何時、人間といふ新しい、しかも特別な動物の種^{スペシイ}が創造されたのだらふか？ 勿論それは儘かに、地球の何處かで、又ある定つた時に、起つたことに違いない。

人間の種は、謂ゆる西半球に於いて創造され、そしてそこを中心として、全世界に擴がつたものでないといふことだけは、先づ正確である。その理由を説明してゐ

ると長くなるから茲には述べないが、兎も角、科學者は、人類の搖籃は、東半球の中の何處かであると信じてゐる。

科學者がかく信ずる理由の一つは、最も古い人間の遺跡、即ち人間がこの世界に存在してゐた最も古い證據が、東半球で發見されたのである。吾々は、ナイル河、ユーフラト河、又は印度の河畔の文明に溯ることが出来るが、これ等の文明は、數千年昔、ある所では八千年から一萬年昔のものである。そして一つの文明の頂點に又も一つの文明を發見する。そこに、その昔人間が、戦争に使つた武器や、日常生活や仕事に用ゐた道具などの遺物が、長い「時」の破壊作用を免かれて、その製作者の逝いたのち長く、今日まで消滅せずに残つてゐるのが發見されたのである。

人間の起源地は、西部アジア、恐らくは現在のアジアの境界よりも、一層南の方で、今は印度洋に埋没してゐる陸地だらうと信せられてゐる。此の想像的の陸地をレムリヤと稱してゐる。

【地理上の變化】 地質學を學ばれた讀者諸君の御承知のように、今日現在の地球の表面の陸地といはれる部分も、一度は海床だつたのである。通常陸地の表面を蔽ふてゐる砂岩や石灰岩は、水中で出來たもので、是等の岩石は水中でなければ出來ないものである。又た魚類やその外の水棲動物の化石が、現に陸上の所々に散らばつて居るし、山の頂上にさへも發見される。何時であつたか、鯨の遺骨が、北部ミシシッピー地方で發見されたことがある。その鯨が死んだときには、恐らく、メキシコ灣から今の合衆國の中部大平原までが、一帯の海洋で、このミシシッピー海とも稱すべき海洋を、その鯨が泳いでゐたものと見へる。

ケンタッキー州のルイズビル市は、其地方を流れるオハイオ河にある、瀧の爲に出來た町であるが、この瀧は、オハオ河を横斷してゐる、珊瑚礁によつて出來たものである。珊瑚礁はいふ迄もなく水棲動物であるが、その珊瑚蟲が今のルイズビル市のある所に、珊瑚礁を作つた。ところが此所を貫流するオハイオ河は、この珊瑚

礁を超えて流れねばならぬので、勢ひ一つの瀧が出來た譯である。そこで珊瑚蟲がそこに棲息し又死んだ頃には、今のインディアナや、ケンタッキーは、まだまだ彼のミシシッピー海の手床の一部であつたのである。

あまりよくは知られてゐないが、今海になつてゐる所も、大部分、一度は陸であつたといふことは、容易に推定することが出来る。或處では、既に海底から石炭を掘り出し居る。若し探掘の方法さへついたら、海底に横はる陸地には、有用なものが澤山あるに相違ない、恐らくは他日、此の陸上の産物が皆盡きたときには、人間は困り切つた揚句、そしてそれまでには海底に行く方法も巧妙になるだらふから、かの大洋に埋れてゐる寶庫の鍵を開くことが出来るだらう。

遠い昔から此方、地球の上には、地理上の非常な變化があつた。即ち百萬年又は千萬年昔の地理は、今日のそれとは非常に異つてゐた。確かに、亞弗利加大陸は、地球史の最近まで、ジブラルタルで歐羅巴大陸と續づいて居つたらしい、又た亞

細亞大陸と亞米利加大陸とは、ベーリング海峡で續づいて居つた。

地質學者の説によると、南北兩米大陸は、その地質史の大部分の間、各々分立した大陸であつたといふ。パナマ地峽の出來たのは、地質學上から云へば、極く最近のことだといふ。そして南米大陸が北米大陸に續く以前に、亞弗利加大陸とも、又た濠洲とも連續して、それ等が相合して南極大陸をなしてゐたことは、殆んど疑ひがない。

地質の第三紀上層時代には、アラスカはむしろ廣い地峽で亞細亞に續いてゐた。北部アメリカに棲む動物の多數は、このベーリング地峽を渡つて、アジャから入つて來たものである。野牛や山羊のような動物は、アメリカの原産ではなくて、地球の第三紀上層時代に、皆アジャから、兩大陸の間の橋なるベーリングを渡つて來たのである。それは此種の動物の遺骨が、今日まで一つもアメリカで發見されぬのを見ても分る。アメリカ印度人も亦た、野牛の渡來よりは餘程後のことだが、疑ひも

なく同じ道を通つてアジャから移住したのである。

地質史の比較的新しい時代まで、グレート・ブリテンの諸島は、歐羅巴大陸に續いてゐて、その一部分をなしてゐた。グレート・ブリテンの最古の住民は、ケルト人であるが、アングロ・サクソン人は、彼等をブリトン人と呼んでゐる。グレート・ブリテンは、人間がそこに殖民したのちまでもしばらくの間は、まだ島になつてはゐなかつたらしい。そこでケルト人は足を濡らさずに、今の北海を超えて、當時の歐羅巴大陸の西部半島へ入りこんだものであらう。即ち人間が最初に英國に殖民した時代は、まだ英國は島ではなくて、半島だつたのである。

【人類の年齢は？】 人間といふものが、動物の一新種として創造されてから、一體何年位たつたかといふことは、誰れにも分らない。然しそれは随分、遠い昔だつたといふことだけは知れて居る。今から五十年か百年前までは、一般に人間といふものは、五千年或は六千年より前には、地球上に存在してゐなかつたと思はれてゐる。

た。だが、人間といふものの研究が進むにつれ、又た地球をよく捜し廻つて見ると生物の起原は、普通考へられてゐるよりも、ずつと古いことが解つて來た、地球上に生物が棲んでから、確かに數百萬年はたつてゐる。ざつと概算して見ると、生物はもう五千萬年、或は一億年も昔から地上に棲息してゐたのである。即ち動物界の歴史は、もう五千萬年或は一億年の古いものになるのである。しかし此の長い時の大部分は、人間が世界に出現せぬ前に、過ぎ去つたのである。人間はごく新しい種である。しかし此新參者の人間が地上に現はれてからでも、既に五十萬年はたつたと信せられてゐる。

【人類の分布】 人類は恐らく、南部亞細亞の印度地方で初て出來たものらしい。

そしてそこを中心として、地球の陸地の表面に大陸ばかりでなく大低の島嶼にまでも、極く徐々ではあるが萬遍なく分布されたものである。そしてその一派は西へ進んで亞弗利亞の黒人種になつた。又た他の一派は、北と西北へ進んで、白色人種即

ちコーカシヤ人種になつた。更に又た他の一派は、北と東に進んで、支那人、日本人等の黄色人種になつた。そしてこの黄色人種の中の一派は、更に亞細亞から動き出して、ベーリングの橋を渡つて、今の亞米利加大陸に渡り、そこで黄色人種が幾分變形して、銅色人種即ち赤色人種、謂ゆるアメリカ印度人になつたのである。そして又人類の他の一派は東へ、東へと進んで、馬來半島、東印度諸島、ボルネオ、ニューギニヤ、南洋諸島、更らに遠くはハワイ諸島まで進入して、褐色人種即ち馬來人種になつたのである。以上の説明で、原始の人間が其搖籃を出て、色々の地方に分布して色々の人種となつた状態について、諸君は大體の觀念を得られたことと思ふ。馬來人は島嶼人種である。彼等は海を愛し、海になれてゐる。そして海と離れられぬ關係をもつて進歩してきたので、彼等は殆ど水棲動物のようなものである。御承知の通り野牛の一種に、水を好むところから、水牛と呼ばれて居るものがあるが、この筆法でゆくと、馬來人は水人と云つても差支へない。

ハワイ諸島へは、北亞米利加からも、亞細亞からも殖民しないで、西南からの褐色人の海賊が最初に殖民した。南洋の諸島の中で、一番ハワイに近い島でも、尙ほ二千哩以上離れてゐる。然らば是等の遠い離れ島の最初の住民は、如何にして千里の波濤を横切つて、人跡未到の離島に行くことが出来たらふか。それは誰にも分らない。しかし恐らくは、その最初の住民は、避難者であつらう。即ち暴風のために波に押し流され、或は人氣のない大平原の中に道を失つて漂浪した揚句、此等の避難者の足の蹟いた所は、今まで知らなかつた火山の頂上であつたのだらふ。慥かにさうした事は起り得ることだ、何故かといふと事實一八三二年の十二月に、ハワイに於いて、一隻のジャク船が生存者をのせたまゝ、西方から陸に打ち揚げられたことがある。

【最初の人間】 原始人、即ち最初に生存した人間は、恐らく小さな散漫な團體で生活して居つた。その一團體は恐らくは二十人が五十人位の僅かな個人から成り立

つてゐた。そして是等の團體は、恐らくその組織に於いて、又生活の方法に於いて今日吾々が、森林や草原で出遭ふ動物の群團によく似てゐたに違ひない。彼等には一定の住所がなくて、果實や、胡果や、木の根や、若い小枝や、又は森の中を彷徨してゐるときに、目についた鳥の卵などを食つて暮してゐた。斯ような原始人の團體にも、法律や政治の、ほんの芽生えの如きものはあつたに違ひない。そして各團體は首領たる、老年の男性に導かれてゐた。首領は比類のない體力と智力によつて、一團體の指導者たる地位を得たのである。彼等の間には、家族生活といふものがない、性の上の混亂は、一般下等動物に於けると同様に甚しかつた。原始人は熱帯の氣候の下に生活してゐたので、衣服も火も必要がなかつた。彼等の手は長く、足は短かくて弱かつたに違ひない。その武器は棒と石で、大きな動物以外のものは、すべて協同の力と、人數の力とで征服した。彼等は恐らく危険が身に迫ると、木に登つて避けたに相違ない。又た彼等の間には、既に迷信の芽生えはあつたらふ。

【人種は何故出来たか？】 原始人の皮膚の色は種々な色、即ち或るものは白色、或るものは黄色、或るものは銅色、又或るものは褐色であつたといふ説は、確かでないらしい。寧ろ原始人はすべて同一であつて、同一の色の皮膚を持つてゐたが、各々數千年といふ永い間、住んでゐた異つた環境の影響をうけて、そこに種々な色や色々の特質を持つた、異つた人種が出来たと見るのが確かである。原始人は皮膚の色も毛髪の色も黒く、その性格や智慧に於いても、寧ろ動物に似てゐたことは疑ひがない。少くとも原始人は白色ではなかつたのである。血族關係に於いて、原始人と最も近い間柄の動物（人間は動物、恐らく類人猿から進化したのである）は白色ではなくて、黒色である。又下等な人種の皮膚や毛髪の色は、一般に白色でなくて、黒色である。各々の人種が現在もつてるような色彩や、性格や、智力は、氣候や土地や、食物や仕事や、永い間順應して來た其他の環境の差によつて生じたものである。

【文明人種と未開人種】 或る人種は、その外觀や、環境や、性質や、智力が非常

に變化して、今日では、大昔かの印度の人類搖籃の地に住んでゐたレムリヤ人とは全く異つたものになつて居る。他の或る人種は、さつぱり進歩しないで、殆んど昔のままの状態に止まつてゐる。是等の人種が、謂ゆる蒙昧人である。蒙昧人はまだ、人類進歩の幼年時代に屬する人間である。彼等はまた、人間として完全に成長して居らぬので、『幼年人種』ともいふべきものである。

褐色人種は、先づ大體、斯ような原始状態にある人間であつて、今日亞弗利加の住民の大部分は、蒙昧時代か野蠻時代かに屬してゐる。野蠻時代といふのは、蒙昧と文明との中間の時代である。印度の下等な蠻族の一部は、白人がはじめて發見した時代には、蒙昧時代に屬してゐたが、今日では、野蠻時代まで進んでゐる。今日までのところで最も有爲大膽な人種は白人種で、白人種こそ、過去に於ける世界の活動舞臺の花形役者であつた。

【人類時代】 人間が用ひた最初の道具は、恐らく木か石であつた。木の枝を棍棒

にしたり、石を飛道具に用ひたりするには、さう大した智慧も要らないが、しかし大概の動物の智慧に較べると、之すらも非常に大きな発明の才能である。狒々は時によると、敵に石を投げつけるし、象は木の枝を折つて、それを蠅叩きに用ひる。又た胡蜂は、極く小さい礫を槌にして、泥を塚の中へ堅く詰め込む。しかし大抵の人間以下の動物は、身體の或る部分が、何か特別な作用をする外には、何にも道具といふものは持つてゐなかつた。

人間が最初に發明したものは、農業の器具ではなくて、武器だつた。原始人にとつての最大の心配は、如何にして食物を得べきかといふ問題ではなくて、どうして他の動物に食ひ殺るされることを免かれるかといふ問題であつた。即ち食糧の問題でなくて、防衛の問題であつた。そこで原始人が世界征服の門出に立つときには、先づ何事よりも先きに、彼等は武装したのである。

人類の進歩は、種々なる時代に分けることが出来る。種々なる時代といふのは

或る一定の進歩や文化の程度を表はした時代の區劃である。こゝに云ふ時代といふ言葉は、決して時間の長さを表すのではなく、進歩の程度を表はすものである。是等の時代は、普通に石器時代、銅器時代、鐵器時代として知られているが、それ等の名稱は人間がその時代時代に、一般に武器や道具に用ゐた材料たる物質の名から起つたものである。

しかしながら一層便利な時代の區別は、蒙昧時代、野蠻時代、それから文明時代と三つに分けることである。次に記す九つの時代は、リュキス・モルガンの名著「太古の社會」^{シエント・ソサイエテ}に用ひてある分け方に従つたものである。

(一)蒙昧時代下期 此の時代は、人間の發生から初めて火をこしらへる技術を發明し、魚を常食にするようになる迄の間をいふのである。

此の時代には人類の數は極く少くて、人間の原産地たる熱帶地方の、何處かの狭い地域内に棲まつてゐるに過ぎなかつた。是等の自然の子は、實に野蠻であつた。

彼等は男と女との、最初の素畫であつた。しかしそれでも彼等は、他の動物の持つて居らぬ一つの物を持つてゐた。即ち單純ながらも明晰な言語であつて、彼等はそれによつて、お互に意思や感情を通じ合ふことが出来た。

ポルネオ島や、馬來半島の内地に棲んでゐる或る蠻族は、今尙この幼稚な時代に、屬してゐる。アンダマン島人は、火を用ゐはするが、火を起す方法を知らぬ。彼等は今でも、自然の火、即ち火山や電光や、それに似たものによつて起る火から火種をもらつて大切に保存し、外出するときには、お互に借合ひをしてゐるのである。

(二)蒙昧時代中期 此の時代は、火ををこす方法を發明し、魚類を常食にするようになった時代から、弓矢を發明するに到つた時代までをいふ。

此の時代には、人類はその原産地、即ち亞細亞か、阿弗利加の熱帶地方の或る處から、ずつと地球の大部分に分布して行つた。人類は巧みに火を起す力が出来たので、年から年中温い熱帶の地を離れて、だんだん地球の寒い方面にも分布して行つ

た。火の發明は、丁度彼等が必要な氣候を持ち運ぶことが出来るようになったも同然である。槍や棍棒の發明は、人類が初て世界の各方面に分布した當初の、唯一の重要な發明であつた。即ち火の發明を除いては、只一の重要な發明であつた。そしてこれ等の發明は、すべての人種に共通した、唯一の發明であつたのである。

濠州の土民や、ポリネシヤ人の大部分は、白人が初て發見した當時には、此の時代に屬してゐた。

(三)蒙昧時代上期 此の時代は、弓矢の發明から、陶器の發明に到る間を指す。

弓矢の發明は中に重要な發明であつて、その重要な程度に於いては、丁度野蠻時代に於ける劍の發明、文明時代 於ける鐵砲の發明に相當するものである。亞米利加印度人の或る蠻族は、白人が初めて發見した時には、丁度此の蒙昧時代の上期に屬してゐた。亞米利加印度人の間には、當時三つの時代に屬すべき蠻族がゐた。即ち蒙昧時代の上期、野蠻時代の下期、野蠻時代の中期であつて、此内の最高の時代、

即ち野蠻時代の中期に屬してゐたのは、メキシコ、新メキシコ、ペルーの印度人であつて、彼等は町に住まつて小麥や馬鈴薯を作つてゐた。

(四)野蠻時代の下期 此の時代は陶器の發明から、東半球では野生の動物を飼ひ馴らして飼養することを發明するまで、西半球では、野生の小麥を植えて耕作することを知るまでの時代である。

陶器を作る技術は、恐らく食物調理の必要から起つたものであつて、木製の皿の焼けるのを防ぐために、その上に粘土を塗ることから起つたものである。

人類が今日の豊かな地位に進むまでには、どんなに苦しに状態を通つて來たかといふことは、とても吾々には想像もつかぬ程である。かの榮華を極めたと稱せられる羅馬人さへも、砂糖の味を知らなかつた。遙かに近代になつてジョージ・ワシントンの家には、ストーヴといふものがなかつた。ヴァーノン山麓には、ワシントンの家が昔のまゝに今も残つてゐる。その臺所には爐が切つてあるが、當時は之で萬端

の料理が作られたのである。しかしストーヴといふものはない。爐と云つても、單に野天火に過ぎぬもので、烟を家に引き入れて室を温め、烟突から出すといふ仕組になつてゐた。

世界の大部分の人類は、亞米利加大陸發見までは、馬鈴薯、小麥、トマト、落花生、七面鳥などを食つたことはない。大昔の時代には、木製の皿に入れて、焼石の熱で料理したものである。ところが皿が焼けるので、彼等はそれを防ぐために、皿に粘土を塗ることを覺えた。その次には粘土が火のために堅まることに解つたので遂には粘土製の皿を造るやうになつたのである。

合衆國ミズリー河以東の印度人の多くや、亞細亞や古歐羅巴の蠻族の多くは、此の野蠻時代の下期に屬して居る。

(五)野蠻時代の中期 此の時代は、東半球では野生の動物を飼ひ馴らして飼養すること、西半球では野生の小麥を耕作するやうになつた時代から、鐵鑛を製鍊する術

を發明し、鐵製の道具を使用するに到る迄を含んで居る。メキシコ、新メキシコ、中部アメリカ、及びペルーの印度人の村落は、歐羅巴人が初めて發見した時には、丁度此の時代に屬してゐた。又アングロ・サクソン人種がグレート・ブリテンの島へ渡つた時代には、その島の土民のブリトン人は、幾分鐵の智識は持つてゐたが、尙ほ此の時代に屬してゐた。

(六)野蠻時代の上期 此の時代には、鐵鑛の製鍊及び鐵器使用の時代から、羅馬字(アルファベット)の發明に到る迄をいふのである。

野蠻時代には、極めて重要な出來事が四つあつた。それは鐵鑛製鍊の發明と、野動物を飼ひ馴らして家畜にしたこと、穀物の發見と、それから最後に、石を建築用材として用ひるようになった事である。モルガンは斯う云つて居る——「鐵の生産は、人類進歩の過程に於ける、出來事の中の出來事である。何物もそれに匹敵するものはない。それに較ぶれば、他のすべての發明や發見は、附隨的な瑣々たる

ものに過ぎぬ」。又たある歴史家は、若し人類が此の金屬の王たる鐵の生産方法を發明しなかつたなら、今日でも尙ほ野蠻時代の状態を脱し得なかつたらうと云つて居る。して見るとお互に、危い所を助つた譯である。

ホーマー時代のギリシヤ民族、羅馬建設までのイタリヤ民族、シーザー時代の獨逸民族は、皆な此の野蠻時代の上期に屬してゐた。

(七)古代文明時代 此の時代は、アルファベットの發明から、歐羅巴歴史の紀元五百年代迄の時代。

(八)中世文明時代 此の時代は、紀元五百年代から、紀元千五百年代まで。

(九)近世文明時代 此の時代は、紀元千五百年代から、現代までをいふのである。蒙昧時代は非常に長くて、野蠻時代と文明時代とを合せたよりも、まだ遙かに長い時代である。若しも人類が地上に棲息してから、五十万年たつたとすれば、その中の四十万年近くは蒙昧時代であつた。人類の進歩は、最初は極めて遅々たるもの

で蒙昧人は殆ど進歩せぬ。彼等には進歩的思想はなく、極めて保守的で、何事も祖先のした通りにする。真に進歩を欲する欲求のあるのは、文明人の間だけである。しかしそれすらも、文明人種の中の、極く小数の個人にのみ見出されるのである。

【蒙昧人の職業】 文明人の間に於ける主なる職業は、農業、牧畜業、製造業、鑛業、及び商業である。下級人種の間には、よし此種の職業をしてゐるものがあつたにしても、極めて幼稚な不活潑なものである。蒙昧人は、野生の世界に生活する。即ち野生の植物野生の動物によつて生活してゐるのである。

蒙昧人の主なる職業は、狩獵と漁撈と戦闘である。蒙昧人は文字通りの「手から口へ」の生活をしてゐる。彼等は將來の爲めに貯蓄することを知らぬ。よし知つてゐても、生産方法が餘りに幼稚なので、とても後日のために貯蓄する餘裕はないのである。

蒙昧人は、野生の動植物を飼養したり耕作したりはせぬが、敵だけは澤山ある。

彼等は常に戦争状態にある。彼等には他の人間といふ敵があるばかりでなく、之を圍繞する他の動物を防がねがならぬ。そこで彼等は、一つには食物を得るため、一つには自己を保全するために、他の動物を殺した。今日でこそは、大きな瘁猛な肉食動物は、殆ど地上から一長されたが、しかしかやうな状態は、人類と人類外の動物との間、弓矢と槍と、牙と爪との、長い間の血にまみれた戦ひによつて、初めて實現されたのである。

蒙昧人は、各々種族と名づける小さな團體の生活をして居つて、是等の種族と種族とは、絶えず互ひに戦つてゐた。文明人の間には、一般は平和状態が続いてゐるが、斯ような状態は、蒙昧人の間には固より見ることが出来ぬ。蒙昧人の間では、戦争が即ち平時の状態であつて、平和は寧ろ非常時なのである。蒙昧人の男は、毎日殺したり殺されたりを仕事として、女は大抵、他かの仕事に従事する。

蒙昧人の間では、女は苦役に服してゐる。骨の折れる仕事は、すべて女がやらさ

れる。男の方が女よりも、遙かに力があるので、男はその優ぐれたる力を利用して女を奴隷にして、生活上の有ゆる骨の折れる不愉快な仕事をやらせて居る。蒙昧人の女は食物の用意し、子供の世話もしなければならぬ。女は恰もその種族に附屬する一群の動物のように立ち働かねばならない。若しその種族が割合に進歩して居つて、農業に従事するとあれば、畑の仕事をするのも女である。

男は女の仕事を、輕蔑の目を以つて見る。エスキモー人の男は、海豹を殺して、それを自分の天幕に近くの海岸まで運んでくる。しかしその海豹を海から引上げる事さへも、男子にとつては恥づ可き事であつて、それは女の仕事になつてゐる。エスキモーの男は、恐らく、文明人の男が自分で洗濯物をしたり、自分の食事の料理をしたりすること對して持つてゐる感じと同じ感情を、前述の如き種類の仕事に對して抱いて居るのである。

水棲動物の獵獲を漁撈といふ。馬に乗つたり獵犬を驅つて魚を取ることは出來

ぬ。魚をとる一番普通な方法は、魚を瞞まかして獲るのである。即ち魚の食物か又はそれに似たものを投げ與へて、魚がそれを呑み込むと、その餌の中にかくしてあつた釣針にひかつてとるのである。

【蒙昧人の性質】 オリヂナル・オブ・シゲイリゼンション ラボックはその著『文明の起原』の中に、蒙昧人の粗野な性情に

ついて、數百の例をあげて證してゐるが、今日文明人の生活を見慣れてゐる者には、とても信ずることの出來ないものがある。

此に記す話は、ヌー族に屬する印度人（亞米利加に住む印度人の一種族）に関するものであるが、書いた人は、永年彼等の間に住んで、よく事情に通じた人である。「彼等は頑固で野蠻で、更らに迷信家である。彼等は文明人が罪惡としてゐる事を殆んど美德としてゐる。竊盜、放火、強姦、殺人等は、彼等にとつては名譽を得る手段である。印度人の子供は、子供時代から殺人は最高の道德であると教へられてゐる。彼等の武人は舞踏會や酒宴の席上で、殺人、掠奪、虐殺などの偉勳を誇り顔

に算へ立てる。そして若い印度人の最上の野心は、『羽毛』を得ることである。之は人間を——男でも女でも子供も、そんな事は一向かまはない——殺したか、又はそれに關與した證據なのである。

バルトンは斯う云つてゐる。『東部亞弗利加の土人には、良心など、いふものはない。罪惡を犯かしたつて後悔なんかせぬ。寧ろ罪惡を犯す機會を逃がした時に後悔する。強盜をすれば名譽を得るし、人を殺せば英雄になる』。

南亞米利加の南端に住んでゐる、フューヂアン族が、物資が缺亡して非常に困つた時には、獵犬を殺さないで、老いた女を殺してしまふ。そしてその言ひ草が面白い。『婆なんか何の役にも立たぬが、犬は川瀬を捕る』。

一人の黒人は、バルトんに斯う語つた。『賣れば賣られる子供を、妹が抱かへてゐるのに、何として自分が餓死せられようか』。この言葉の意味は、自分の姪や甥を奴隸として賣らずに育て、ゐる間は、彼は餓を忍ばねばならぬといふのである。

ラポックは、ボルネオ内地の野蠻人のことを述べて、次のように記してゐる。

『彼等は徹頭徹尾、自然の状態に生活する。土地を耕すでもなく、狩獵をするでもない、彼等は森林の中を、丁度野獸のように、始終ぶらつき廻つてゐる。その子供は相當の年になつて、自分で糊口するようになると、大抵親から離れてゆく。それ後は、親が子を思つたり、子が親を心配したりなんかせぬ。彼等は夜になると、枝が低く垂れてゐる大きな樹の下に眠るのである、』

濠州の土人が、初めて牡牛の群れを見た時にも、或者は、頭の上に二本の槍を戴く神だと思つた。又た或者は、それは移住民の細君かと思つた。何故といふと是等の牝牛は、移民の荷物を搬んでゐたからである。

蒙昧人は暗黒を非常に恐れて、すぐ泣き叫ぶ。彼等は玩具が好きで、意志が極めて薄弱で、推理力に乏しい。彼等は非常に氣が變り易くて、とても信賴することが出来ぬ。おまけに自分を大變えらうと思ふて居る。すべて是等の特質は、文明人の

子供によく似てゐる。

リチャードは亦た、ドグリップ印度人に就いて、次のように記してゐる。「どんなに澤山の報酬をやる約束をしたつて、とても彼等に手紙の送達を頼むことは出来ぬ。彼等はとても當てにはならぬので、その送達の途中に、一寸でも六ヶ敷しいことが起きたり、又はは美味そうな食物でもありそうだったり、又はあゝしやうとか、斯うしようとかと云ふ衝動が不意に起つたりすると、もうすぐ氣が變つて、手紙の送達などはいつまでも、打ち棄てゝをくのである」。

或る著述家は、馬來半島の種族に就いて、記るして居るところによると、彼等は常にそれはしてゐて、現に今自分の居る土地から離れて何處かへ行けば、もつと幸福になるように思つてゐる。彼等は子供と同じように、何事もすべて衝動的に行ひ、反省してやると云ふことは殆んどない。

南洋の土人は、どんな感情にせよ、激して來ると、子供のよう泣き叫ぶ。そし

て子供のやうに泣きやむと、けろりとして、今泣いた事も忘れてしまふ。ニュージランドの酋長は、船員が彼れの大切にしている外套に、小麥粉を振りかけてよこしたら、子供のやうに泣いたといふ事である。

キャピテン・クツクの話によると、タヒイチ人の王と妃は、二つの大きな人形を持つて喜んでゐた。又たバルトンの話では、「一般に西部亞弗利加の黒人の王様は、八才位の子供しか喜ばぬようなゴム人形などを持つて喜んでゐる」實際黒人は、文明人の七八歳の子供なのである。

子供と同様に、蒙昧人は氣紛ぐれで氣が變り易く、その時その時に起る感情や衝動のまゝに動いてゐる。彼等は色々の情緒の集まつたもので動いてゐるのではなくて、次から次と起つて來る一つ一つの情緒に支配されて居る。云はゞ蒙昧人の性質は、理性によつて統制された共和政治ではなくて、感情の専制政治である。

【蒙昧人の理解力】 蒙昧人に取つては、すべての事物は目に映じたまゝのもので

あづて、其奥にひそむ原因を見ようとせぬ。彼等の事物の説明は、丁度小供の説明と同じである。大陽は、その見へる通り、實際に朝東の空から昇つて、夕西の空に入るのである。風は生きてゐる。病氣は悪魔の仕業であつて、悪魔が體にはいつて自然の靈魂を退出すから病氣になる。夢は實際の経験であつて、人が眠つてゐる間に、靈魂が體から抜け出して、徨ひ歩くのである。水面にうつる人の影は、實際の體の一部分である。蒙昧人は寫眞を撮ることを非常に嫌ふといふのは、寫眞を寫すと、何か自分の體から奪ひ取られると思ふからである。現に阿弗利加のバースト人は、川岸を歩くときは、非常に注意して自分の影を水面に寫さぬやうにする。影が鱒に喰はれたり、又た鱒がその影を捕へて、自分を川の中に引張り込むことを恐れるからである。

蒙昧人の間では、雷は實際の神か、或は神の聲だと考へられてゐる。タンナーは「或夜、印度人の酋長が、嵐の音をきいて非常に驚いて跳ね起きた。そして煙草を

雷に捧げて、嵐を止めんことを願つた」と云つて居る。

蒙昧人の考へでは、すべての物は靈魂を持つてゐて、すべて靈魂によつて動いて居ると思つてゐる。時計は生きてゐるもので、時計がチクタクとなるのは、その中にある魂の作用である。風の音は、即ち風の聲であり、活きたものゝ聲である。森の木が倒れると、魂がその木の中へ入つて来て、それを倒をしたのだと信じてゐる。若しも偶然、樹が自分の方へ倒れかゝつたりすると、靈魂が何か自分に怨があつてわざと自分の進む方へ、木を投げつけたものと信じてゐる。蒙昧人は、自然の法則などといふものは知らないし、化學も、物理學も、生理學も、何んにも知らない。木の一片が火で焼けた場合には、その焼けた木片の物質は、すべての意味に於いて、消滅したものと解釋するのである。

如何なるものも、未だ嘗つて消滅したことはない。今日存在する物質のすべての分子は、永久に存在するのである。消滅したり創造したりすることは出来るのは、

唯だ形だけであつて、物質の形は變つても、それを構成する原子そのものは、依然として残つてゐる。これは近世化學の發見の一つであつて、謂ゆる物質不滅の原則である。一枚の紙が焼けた場合には、紙を構成してゐた物質のすべての分子は、焼けてしまつた後も、その形は變つたが、前と同じやうに存在してゐるのである。紙を構成してゐた炭素は、空中の酸素と化合して炭酸瓦斯になつて空中に飛散し、遂には目に見えなくなる。然し蒙昧人は、斯ような變化は何にも知らないから、紙が焼けると、その紙は二度と目に見えないから、焼けると同時に、一切消滅したものと信じてゐる。

蒙昧人の解釋によると、靈魂には善靈と惡靈がある。惡靈は善靈よりも、一層數が多くて力が強いと思つてゐる。善靈は自分の味方である。そして惡靈に對しては、之を欺いて恩惠を受けやうと、常に努めてゐる。彼等は狩獵に出かけて、其日の獲物が多かつたり、敵と戦つて勝利を得たりした場合には、その成功は、善靈の庇護

であるとし、此れに反して、彼等の計畫が失敗したり、又は不慮の災難に遭つたり、病氣になつたりした場合には、すべての不幸は、惡靈のために蒙つたものだと思つてゐる。そこで彼等にとつての大問題は、この二種の靈魂を、どうして巧妙に取扱ふかといふことである。これ等靈魂は、幽靈のやうに彼等を訪づれば、鳥のやうに彼等の頭上を舞ひ、生れてから死ぬまで、犬のやうに常に彼等の足許に附纏ふてゐるものである。

蒙昧人の醫術は、次のような根本原理が基礎になつて居る。病氣は體の中で、一つの靈魂が他の靈魂の廢立を企てる。そこで二つ靈魂が相争ふ。そして病氣は、惡靈が篡奪者となつた場合に起るものである。彼等の間には、病原菌などといふものはない。蒙昧人の醫者は、アンチトキシンなんかは用ひないで、トムトムや、苦い藥を用ゐる。醫者の仕事は、患者の體から惡靈を逐ひ出すことである。だから彼等の醫者は大きな聲をあげて、侵入者を威嚇して逐ひ出さうとしたり、つまらぬ藥品

を患者に注ぎかけ、かくして悪霊を出で行かそうと努めるのである。

誰かが死んだ場合には、その魂は死骸を埋めた場所の周圍に、しばらく彷徨ふると信じてゐる。今日化物屋敷とか幽霊が出るといふような思想は、古い蒙昧人の靈魂説の遺物である。

蒙昧人は、吾々が知つてゐるやうな、自然の法則などは何にも知らないから、前兆や奇術や奇跡をそのまま信じてゐる。エスキモー人は、その子供が病氣になると、親が子供の病氣の間、間食物を變へなければ全快すると信じてゐる。又た大人が病氣になつたときに、若しその兄弟が、カラプウの左の側を食ふと、きつと悪くなると思つてゐる。しかしこんな馬鹿らしい、非科學的な考へも、丁度厄除けのまぢないに、栗の實や兎の足をポケットに入れておいたり、その他この文明世界の眞中で、文明人のやつてゐる此種の無數の習慣と、同じような理由があるのである。

未開人種の間では、何處へ行つても、魔法といふものを信じてゐる。魔法使は、

魅力又は呪文によつて、誰れでも彼の慾する人の上に、悪霊の怒りを呼ぶことの出来る人間である。即ち悪魔と同盟を結んでゐる人間と思はれてゐる。魔法使の用ひる力を、魔法といふ。歴史時代になつてからでも、魔法を使ふことは名譽ある職業であつた。魔法は人心を悩ました最も悪い迷信の一つであるが、斯のような迷信の全然なくなつたのは、比較的最近のことである。シエクスピアの戯曲を讀むと、當時は一般に魔法が信せられてゐたことが分る。米國でもサレムやマサチュセツツの人民は、曾ては魔法といふものは、否定すべからざるものと考へてゐたし、メキシコ市では、一一七三年までは魔法使が公認されてゐたのである。

多くの蒙昧人種は、數の觀念が幼稚で、五乃至六より大きな數を理解することは出來ず、どんな平易な計算でも、指を折らないでは能くしない。彼等は暗算が出來ない。彼等には暗算の能力がないのである。

蒙昧人の心の作用は具體的であつて、それは唯だ、實際の事物の外は取扱ふこと

が出来ぬ。數のような抽象的な觀念は、蒙昧人の單純な官能的の智力には、縁遠いものである。或る著者が、ダマラ黒人のことを述べた中に斯う云つて居る。『彼等は數を算へて、五以上になると、非常に迷ふ。何故かと云ふと、もう餘分の手がないので、指を折つて數へることか出来いからである。斯うに數の觀念がないにも拘らず、彼等は牛を見失ふことは殆どない。牛の數の足らぬことを見出すのは、散らばつてゐる獸群の數を算へて見て解るのではなくて、常に見覺へのある牛の顔が見へないので氣がつくのである。そこで物々交易の場合にも、渡した羊の一匹一匹についた交換物を受取らねばならぬ。假りに一匹の羊の値が、煙草の木二本に均しいとする。この場合に、二匹の羊を受取つた代りに四本の煙草の木を渡さねばならぬといふことは、オダマラ黒人に取つては中々解らない』同じ記者は又、こんな事を云つてゐる。『ダマラ人は、AからBへ、又BからCへ行く道は完全に知つてゐるが、AからCへ眞すぐに横切りて行くといふ風な觀念は、更らにないのである。』

蒙昧人の持つてゐる器具や武器を研究してみると、それ等の器具や武器は、數千年の長い間の、改良の結果であることが解る。是等の器具や武器は、決して一時に發明されたものではなく、不斷の少しづつゝの改良、それも多くは偶然の改良によつて出來たものである。彼等が、その使用してゐる器具の中で、一番よいものを選んでゐる中には、之といふ發明もしないで、今日のような色々の器具を作るようになったのである。

【蒙昧人の道德觀念】 大昔の人間に發達した道德は、その個人及び種族全體の保全に必要な道德、即ち勇氣、忠誠、忍耐、社會的感情、名譽心、廉恥心であつた。

どちらを向いても敵に圍まれゐる蒙昧人の種族に取つて、有用な人間は、勿論勇氣がなければならぬ。そこで勇氣といふ性質は、原始人の間では、一般に賞揚されてゐた。文明人の間には危険が少くなつたので、自然、肉體的の勇氣を振ふ場合が少くなつた。そこで肉體的の勇氣よりも、精神的の勇氣を賞讃するようになった。

結局この世界の英雄は、種族的の英雄、國民的の英雄ではなくて、人道の英雄といふことになるだらう。

人間はその昔狂暴な時代には、相團結して居つた。そして之が唯一の生存の途であつたからである。離れくゞの個人は、生存の闘ひには何の役にも立たぬ。何人とも孤立しては生きて行かれない。個人は其力を他人の力と協はせてこそ、初めて生存することが出来る。ところが仲間の助力を受けたいなら、仲間に助力を與へねばならぬ。仲間の忠實を願ふなら、仲間に對しても忠實でなければならぬ。之は道理によつて直ぐ分かる。そこで忠誠は原始人の間に於いては、何處でも最も重せられてゐた。蒙昧人が、自分の同志を賣るよりも、寧ろ自分の生命を犠牲にして捕虜となつた實例は、幾らも記されて居る。

一 種族全體の幸福のために必要な事は、すべて忍耐がなければ出来ないことであるから、蒙昧人の間では、忍耐といふ性質は、いつの時代にも非常に重せられてゐた。亞米利加印度人は、自己の剛毅堅忍の性を示すために、自ら進んで、最も苦痛な拷問をうけ、しかも唸聲一つも發せず耐へ忍ぶのである。粗暴な半未開的な少年時代を顧みると、その思想の多くは蒙昧人の思想であつた。吾々子供仲間に普通に行はれる人格試験は、二の腕の皮膚の一部を、鋭い指の爪の先で抓み取り、痛さを我慢することであつた。そして澤山の傷痕を示した子供は、他の子供らから一種の英雄として尊敬される。そして吾々はすべて、その少年の味方になつたのである。

人間の社會的性質は、恐らくは猿に近い祖先から遺傳したものであるが、彼等は緩やかな團體、若くは種族を作つて生活して居つた。社會的性質と一緒に移動したり、一緒に生活したり、生存競走の爲に互ひに扶け合ふ傾向を指す。一體、社會的動物は、お互に血縁がついてゐる。そしてその種族から離れて、獨りで生活しては不安でもあり、また不自由でもあつた。初期の人間も、この感情を持つてゐた。

人間は抑々の初から、互に一種の同情心を持つ必要があつた。そして互に危険を警告し、敵に對する攻撃や防禦には、相互扶助を實行しなければならなかつた。ところが人間が段々ど、この世界の主人公となつて來て、人間以下の動物は、最早やさほど重大な敵でなくなつてくるにつれて、今度は人間同志が互に反目し始めて來た。この長い間の、狂暴な人間同志の争闘のうちから、一方には種族的の本能や、觀念や、偏見や、憎悪などが生まれて來、又た一方には、團結、忠誠、愛國心などが發達した。

名譽心や廉恥心などは、すべての蒙昧人の間に於いて、文明人の間に於けると同様に、最も有力な行動の要因である。名譽に對する慾求は、最も未開な蒙昧人の間に於いても仲々強い。これは彼等が非常に自慢することや、身を飾ることに非常な注意をすることや、一種の名譽の印に過ぎぬ戦利品を求めのを見てもよく解る。

蒙昧人は、自分の生存してゐる世界に就いての智識は、ほんの少しかない。彼等の間には、鐵道もなければ、電信も、電話も、新聞も、書籍も、何にもない。彼等の目に見、耳に聽く所のもの、これが彼等の主たる智識である。彼等の世界は、殆ど彼等の狭い眼界に限られて居る。彼等の視界を遮る山脈の彼方には、一體何があのか、彼等は少しも知らぬ。しかし何か居るとすれば、敵が居るのである。そして、山脈の彼方の仲間も、此方の仲間に對して同じように感じてゐる。

山脈が間に挟まつて

國民を仇同士にした

さもなかつたら、是等の國民は

同じ性質の滴のように、一つになつてゐたらうに

蒙昧人の種族は大部分、同一血族からなつてゐる。そして自分の種族のものに對しては、お粗末ながらも一定の道德律を守つて居る。けれども自分の種族以外のものは、すべて敵であつて、これに對しては、彼等は全く差別的な行爲をする。蒙昧人が同種族の者に對して行つた場合には、罪惡として見下げられる行爲でも、種族以外の者に對して行つた場合には、無害な行爲、乃至は褒むべき行爲とあるのである。行爲の善惡は、その行爲そのもの、性質と結果で判斷されるのではなくて、その行爲を種族外の者に對して行つたか、種族内の者に對して行つたかによつて判斷されるのである。

バランテイー人（阿弗利加）は、同種族の者から盜むと死刑に處せられるが、他の種族から盜むことは、これを獎勵し、褒美を與へるのである。

アフリィデー人（アフガニスタン）の母親は、自分の息子が立派な盜賊——同族

から盜むのではなくて、他種族から盜むのである——になるように神に祈願する。そして息子を巧妙な犯罪人にする爲めに、母親は壁にあげた穴を、こつそり潜ることを教へこむのである。

斯ように蒙昧人は、同種族の人々を取扱ふ場合には、一種の道德律を守るが、種族外の者に對した場合には、打つて變つて襲撃もすれば、竊盜、詐欺、殺害もする。その肉をも啖ふ、そして之を奴隸にすることは當然のこと、考へて居る。蒙昧人は自分の種族、即ち同一團體に屬する人々に對しては、忠誠で同情が深く、信賴することが出来る。他の團體の人々には全く反して居る。

サー・ヘンリー・メーンが、は白人種の祖先に就いて述べたうちに、次の如くを云つて居る。『吾々の祖先の蒙昧人は、實際の血族關係以外には、同胞などといふものは何にも認めてゐなかつた。血族關係がすべてであつて、若しも二人の間に血族關係がないならば、その二人の間には、全く何等の交渉もないのである。後者は前者

にとつては、彼等が常に争闘をつゞけて居る、實際最も狡猾で最も残酷な野獸と同様に、憎悪すべき、殺すべき、掠奪すべき敵なのである。實際、彼等の陣營についてゐる犬の方が無關係な他の種族の者よりも、一層親しい關係を持つてゐると云つても過言でない。』

蒙昧人が、見知らぬ者や自分の種族外の者に對して抱く敵意や憎悪の感情は、自己の種族内の者に對する強い社會的感情の補足物、乃至は反對と見ることが出来る。同情と嫌惡との關係は、丁度、快樂と苦痛との關係と同じである。

蒙昧人が道徳上に優れてゐる點は、鬭争と戰爭の絶えぬ世界に於いて、種族の存在に必要な色々な道徳の實行である。即ち勇氣、忠誠、忍耐、同情、及び其種族の社會上、宗教上、政治上のすべての制度や規則や習慣を一般に遵奉することに外ならぬ。これ等の道徳は、多かれ少かれ種族といふ範圍を脱せぬものであつて、自己の種族外の者に對しては、憎悪、頑迷、詐欺、竊盜、更らに殺害までも、これ

を獎勵し、是認する。節制とか謹慎とか貞節とか勤勉とか克己とか清潔とか、乃至は自己改善の慾求など、云ふ私的道徳は、人類進歩の遙かに後の時代に發達したものである。人道、正義、慈善、報恩、進歩の慾求など云ふ諸徳も亦た、種族時代以後に發達したものである。

蒙昧人の外に準蒙昧人ともいふ可きものがある。蒙昧人と云つて居るうちには、随分廣い範圍に亘る人類の發達と文化とを含んで居る。そして蒙昧人と云はれてゐるものうちには、本講に述べた實例よりも、その性格や知識が一層高い程度に達して居るものもある。けれども人間は下等動物から發達したのであるから、現在生存してゐる蒙昧人の中の最も下級なもの、即ち本講に述べた實例よりも尙ほ一層下級な一層動物に近い蒙昧人との間にも中間の生物があつた筈である。

第四講 文明人の野蠻性

【第四講の目的】 本講の大體の目的は、吾々人間の性質と、現に吾々の持つてゐるような性質は、どうして出来たかと云ふ由來に就いて、大體の概念を與へることである。

人間性は決して變化せぬ。過去に於いても常に現在と同一であつたし、又た將來に於いても、常に現在と同一であるとは屢々聞くところである。しかし之は誤つて居る。人間性は發達の結果、初めて今日の如きものとなつた。そして未來も絶えず變化を續けて行く。要するに人間性は、かの石炭や、谿谷や、山脈などと同様に、漸次に「形成」せられたものである。

曾ては吾々は、石炭は初めから地中に埋没してゐたのだと信じてゐた。ところが

今日では、それは殆どすべて、石炭時代と名づける地球のある時代に形成せられたものだといふことが解つて來た。この時代以前には、地中には石炭は全然なかつたか、ほんの少しばかりあつたに過ぎなかつた。今日吾々の知るところによると、石炭は先づ幾時代の間か、成長して倒れた植物質の堆積によつて形成され、更らにその上を岩石の堆積物で厚く蔽ひ、斯くて之に加へられた熱と壓力との差によつて種々な石炭——硬炭とか軟炭とかいふような——が形成されたものである。

曾ては吾々は、山脈や谿谷は、今日見るがまゝの形で、初めから存在してゐたかの如く信ずるのが常であつた。然し地質學を學んだ諸君のよく知つてゐる通り、谿谷はその間を走る河流に削りとられて出来たものである。又山脈は、風化作用や侵蝕作用によつて、今日見るような形に、高く聳え立ち、鋭く刻まれたのである。そして人間性とても同様で、長い間の發達の結果、今日の如き人間性が形成されたのである。そして私は本講に於いては、人間性の中にある二三の本能の起原に就いて

大體の概念を與へたいと思ふ。

文明人の性質に見る最も有力な傾向は、多くは廢退的の遺物である。それ等の傾向は、大昔の原始時代には有用であつたが、今日では、周圍の状態が變つたので、最早や無用なものである。これ等の性質は、かの虫狀突起や、耳筋肉や、其他人體に不必要な部分のと同じを留めてゐる法則によつて、吾々人間の性質の中に、根強よく残つて居るのである。デアキンは、人體には廢退的な部分、即ち何の役にも立たぬ部分が八十あると云つて居る。そして人間性の大部分も亦た廢退的なものであつて、其れは身體に於けるよりも一層澤山ある。吾々の身體には、非常に澤山の廢退物がある。けれども吾々の心や性質の中には、更らに一層澤山の廢退物が残つて居るのである。

『文明は裾を曳いてゐる』。誰やらが斯う云つたが、確かに其通りである。しかも甚だ長い裾である。文明は、曾ては人間の役に立つたが、今日では既に時代おくれと

なり無用となつた色々の觀念や、信仰や制度から成立つて居る。是等のものは、吾々に棄て去るだけの力がないから、止むを得ず其儘になつてゐるものである。世界は書籍と同じように、絶えず新版を發行して、無用なものや誤つたことは削除し、一層進んだ見地から來る新しい材料を挿入すべきである。

人間性は他のすべてのものと同様、徐々に變化する。千年前の人間性は、今日の人間性と同じでない。又た今日の人間性は、千年後の人間性と同じでない。吾々の棲息する宇宙は、萬物流轉の宇宙である。人間性も他のすべての物と同様に、徐々に變化する。然し或る特定の時期を取つて見ると、人間の性質も人間の身體や人間の文明と同じように、吾々が自己を改訂して最新版とし得なかつた爲に、今尙ほ殘存してゐるものゝみから成り立つてゐることがある。吾々は何から何まで、現在のものではない。吾々の持つてゐる多くのものは過去から引繼いだものであつて、又た實際過去に屬するものである。

そこで斯ような残存物の意義を知ることには、大いに必要である。殊に是等残存物が不合理なものだと云ふことを明自に認めることは、尙ほ一層必要である。本書の最初の五講は、即ち諸君に是等の事柄を教へるものである。

第一講の『家畜の起原』は、すべての家畜は、野生動物から發達したことを教へた。それは諸君に、家畜の祖先たる野獸の棲んでゐた當時の世界と、彼等がどんな生活をしてゐたかについて、大體の觀念を與へたのである。

第二講の『家畜に残つてゐる野性の遺物』は家畜の性質の中には、先祖譲りの野獸性が尙ほ澤山に残つてゐるといふこと、家畜はその環境が全く變化したにも拘らず、その性質は種々なる方面に於いて、變化しなかつたといふことを説明した。

第三講の『文明人の起原』は、文明人種も、丁度、家畜が野生動物から發達をしたように、蒙昧人と名づける原始人から發達したものであるといふことを示した。又、蒙昧人の性質、その當時の世界はどんな世界であつたか、それが蒙昧人の行爲

その他に就いて、大體の説明を試みた。

そこで第四講第五講の『文明人の野蠻性』に於いては、文明人の性質の中にも、尙ほ多くの原始人の痕跡が残存してゐるといふことを、諸君に説明しようと思ふ。

【本能の意義】 本能といふのは、或る事柄を或る方法でやらうとする、經驗によつて學んだのではない、生物の自然の傾向をいふのである。本能は先天的のものであつて、吾々が此の世に生まれ落ちるとき、持つて來たものである。鳥は生まれながらの性質に驅られて春は北に、夏は南に飛んでゆく。鳥は決してこれ等の事柄を學んだのではない。斯ような傾向は生れつきであつて、その性質の一部である。鳥の母も、牛の母も、人間の母も、自分の子供を愛することを、他から教へられたのではない、それは本能であつて、冷たい動物生活の世界に於ける、最も美しい本能である。

諸君は曾つて森の中を歩いてゐるとき、子をつれて巢の外に出てゐる野生の鷓鴣

を見たであらう。母鳥の警告の叫びを聞いて、小さいなむく毛の玉のような雛が、花苞のように散るところを見たであらう。生れてから一日か二日たつたばかり、鳩の雛は、やつと歩けるか歩けぬか位になると、もうこの小さな生命の擁護者は母鳥の危険信號の叫びを聞くと恰も長い間練習してゐたかのように、迅速に巧妙に散らばつて、葉の蔭に潜り込んだり、或は地上の小さな孔に蹲くまつて、石のやうにちつと身動きをしないのである。その様子が如何にも落葉に似てゐるので、慣れた者でも見つけ出すことは殆ど不可能である。これ等の小さな雛は、斯うすることを何人からも教へられたのではない。雛が卵から出てくるときに、背骨やむく毛や、食慾などと一所にこの本能をも持つて來たのである。

本能は有用なものであつて、理性や經驗の代りをする。異つた種は各々異つた本能を持つてゐるし、同じ種に屬するものは、同じ本能を持つてゐる。いづれの種に屬する動物でも、その性質と云へば大部分、本能又は傾向からなつて居る。あらゆる

種に屬する動物の性質は、各々異つた一組の本能からなつてゐる。そこで人間性と云へば、吾々の屬する種が持つてゐる本能又は傾向に對して與へた名稱である。狐の性質とは、狐の有する本能の名稱であり、馬の性質は、馬をして、色々な事をなさしめる衝動や本能からなつてゐる。

すべての高等動物（人間も含めて）の性質は、丁度すべての高等動物（人間をも含めて）の身體の構造が根本に於いて同一であるように、根本に於ては著しく相似てゐる。すべての高等動物は、皆な脊推骨を有し、肋骨、四室に分れた心臓、二個の肺臓、同じやうな骨から成る二對の肢、目、耳、鼻、口が互に同一の關係を保つて、配置されてゐる頭を持つて居る。そして之れはすべての高等動物の性質に就いても同様であつて、彼等は同一な性質によつて吾子を案じ煩ひ、配偶者を愛し、餓えれば食を求め、出来るだけ長命を保つことに全力を盡す。犬、猫、馬、人間、是等のものは、よしその性質に於いて、お互に色々な著しい差異はあるけれども、それに

も拘はらず、生きんとする努力や、絶えず苦痛よりも快樂を選ばんとする點に於いては、すべて同一である。

【習慣の意義】 習慣は第二の天性であると云ふが、實際適當な言葉である。習慣は實際第二の天性である。第一の天性は、吾々が生れぬ前に、吾々の肉體の發育とともに成長したところの傾向からなつてゐる。本能は吾々が生れるとき一緒に持つて來たところの一定の方法で或事をしようとする傾向であつて、習慣は、吾々が生れた後に得たところの、一定の方法で、或事をしようとする傾向である。そこで吾々の行爲の天然自然の方法は、生れて後に得た後天的な習慣によつて、制限される譯である。

習慣は反復、即ち物事を何度も何度も繰返へして行ふことによつて形造られる。若しも吾々が一度やつた事を、決して再び繰返へさない世界に住んでゐたならば、習慣といふものは出来なかつたであらう。吾々が或る事柄を屢々繰返せば繰返すは

ど、一層その事柄を繰返す傾向が強くなつてくる。若しも吾々が或る事柄を屢々繰返してゐると、それは一つの習慣となる。そして遂にはそれが凝まつて、吾々の性質の固定した一部分になつてしまふ。吾々の生活は殆んどすべて、歩むこと、書くこと、食ふこと、遊ぶこと、働くこと、着物を着ること、それを脱ぐこと、その他あらゆる種類の反復によつて満たされて居る。吾々は何十萬度も繰返へし繰返へし、歩き、話し、食ひ、働き、着物をつけ、夢をみ、沐浴みし、又た吾々の姓名を書いたので、その結果吾々は、これ等のすべての事をする場合には、ちやんと一定の型にはまつてしまつたのである。かくして吾々は、或る一定の歩るきぶりをするようになり、又た筆跡にも一種の態ができ、話すにも一種の型ができ、又た着物を着るにもある順序が出来上り、飲物や食物にも一定の嗜好物が定まり、外觀や性癖も一種の型を備へて來る。尤もそのうちでも、例へば吾々の容貌や性癖のように、大に先天的の性質によるものがある。然しそれでも尙ほ容貌や性癖などは大部分は

習慣の結果である。顔は心の鏡である。吾々が怒や喜のような、一種の感情を持つてゐる場合には、自然にそれが顔に現はれて居る。そして若しもその感情を何度も何度も繰返へしてゐると、それは固まつてしまふ。即ちそれが平素の顔の表情になつてしまふのである。そこで吾々は初めて會つた人でも、その顔に表はれてゐる心の状態によつて、その人が思想家であるか、樂天家であるか、又は賢人であるかといふことを見別けることが出来る。

習慣は過去の長年月の間の、行爲の反復によつて深く刻みつけられたものである。習慣が初めて出来かけた時分には、吾々は或事柄を選ぶがまゝにしたりしなかつたりすることが出来る。しかし中頃になると、その習慣と異つた風に、或る事柄を行ふことが大敷しくなり、又は全く不可能となつてくる。即ち習慣が行爲の支配者になるのである。吾々は肉體上の習慣を造ると同様に、精神上、道徳上の習慣をも形づくる。吾々は一定の考へ方で物を考へ、一定の事柄を信ずる習慣が出来る。そし

て是等の事柄を幾千度となく考へると、最早や違つた風に考へられなくなつて来る。若しも吾々が、月は未熟乾酪で出来てゐるといふように、百萬度も考へると一生涯違つた風に恐らく考へることが出来なくなる。諸君は政治上、宗教上、教育上などに、各々或る一定の信念を持たれて居るであらふが、諸君が斯のような信念を持つやうになつたのは、諸君が或る一定の地方に、又た或る一定の家族の中に成長したからである。若くも諸君が生れた家族や地方と、全く異つた家族や地方に生れたのであつたなら、諸君の信念は色々な點に於いて、全く反對なものであつたらう。それ故に両親や生れた場所の如何は、吾々に取つては緊要な問題である。何故ならば吾々が成長して、どんな男なり、どんな女になるかと云ふことは、子供時代に如何なる種類の影響が吾々の心に打ちこまれたか、又た如何なる型にはめられたかといふことによることが、非常に多いからである。吾々が正直又は不正直、親切又は不親切、眞實又は不眞實などの習慣を得ると、それは年月を経るに従つて、地球の運行

のように正確に、吾々の人格の中へしつくりと食ひ入るのである。

【有用な本能と廢退的本能】 有用な本能とは、吾々の生活に必要な本能である。此種の本能は、吾々を有利な方向に行動せしめる。すべての動物は、いづれもその個體を維持し、種族を保存する爲めには、一定の事柄をしなければならぬ。動物をして必要な事柄を爲さしめる衝動又は傾向は、即ち有用な本能である。之に反して動物の行ふ事の中で、其動物に取つて無用なこと、不便なことをさせる衝動又は傾向は、すべて廢退的本能なのである。

私が少年時代に田舎にゐて、常に不思議で堪えなかつた事は、牛や馬や羊やその他の家畜が、子を産むと残忍性を帯びて來ることである。或る朝、納屋へ行つてみると、牛が仔を産んでゐた。その牛は中でも一番柔和な牛で、日頃は、どんなにおもちゃにしてもよかつた牛である。ところが仔を産んでからは、がらりと變つて來た。此點は牝牛によつても違ふが、先づ全ての牝牛は仔を産むと、その仔の側へ

近づくるものには、誰れ彼れの容赦なく攻撃の態度を示すものである。

私は少年時代には、何故に斯うなのかといふ理由は、大して考へもしなかつた。唯だ一晚のうちに、急に變はるのを不思議に思つてゐた。

若しも私が、其時近所の人に、牛が何故そうするのかと尋ねたなら、恐らく『それは當り前だ』と答へられたらう。「當り前だ」といふ言葉は、吾々が自分の解ぬ事を尋ねられた時、自分の知らぬことを蔽ふために、よく用ひる言葉である。

然しすべての事は當り前——即ち自然——である。何物も當り前でないものはない即ち何物も、自然の一部でないものは無いのである。又それと同時に、吾々が發見さへすれば、全ての物には説明がある。そこで諸君が先づのみ、こまねばならぬこと、且つ善くのみこんで置かねばならぬ事は、すべての物事には、理由があるといふこととづある。吾々の智的生活のうちにある大なる喜びの一つは、この複雑な世界を探求して、全ての事柄から、その理由を發見して行く喜びである。

牛は野牛から發達した。そして野牛の棲んでゐた世界と、今日家畜たる牛の棲んでゐる世界とは、非常に異つて居る。野牛は森林の中に、或は原に、狼や熊やその他の野牛を食物とする猛獸に圍まれて生活して居つた。他の動物と同様に、野牛もその棲まつてゐた世界に適應して居るもので、その當時の世界に生存するに必要なような體を持つて居り、又その世界に生存する必要な事柄を爲さしめるような本能をも備へてゐた。野牛は大きな體と、強大な筋力を持つて居り、頭部には防禦の武器として、角を持つてゐた。此の一對の防禦の武器がなかつたなら、野牛種屬は、とても狼や熊の世界には、長く生存を續け得なかつたであらう。

仔を保護する本能は、野生動物の持つてゐる最も重要な本能の一つである。生まれたばかりの仔牛は、搖籃に眠る人間の子供と同じように、極めて弱々しいものである。このか弱い仔牛を、數百の餓えた野獸が口をあけて待つて居る世界に投げ出して、しかもそれを世話してやる者も、防禦してやる者もなかつたなら、とても牛の

種屬は永續はしなかつたであらう。従つて自分の仔を愛護する動物の種のみが残存し繁殖した。そこで多くの動物の母性には、その種の子孫を、愛撫し保護する本能が植えつけられて居るのである。

全ての家畜は、野生動物から發達した。その環境は人間の飼養によつて、著しく變化した。岡や、森林や、平原の間に徨ふてゐた野生生活の時代にしてゐた事を、農園や牧場や納屋の中に飼はれてゐる今日、同じようにするには及ばない。それ故最早や今日では、無用なものであるが、これ等の本能の多數は、今尙ほ残つてゐる。それは丁度、人體の耳筋肉や虫狀突起や、又は牛の角などと、同一性質のものである。即ち廢退本能であつて、曾ては有用な本能であつたが、今日では環境の變化の結果最早や無用となり、徐々に消滅しつゝあるものである。

〔人間の廢退本能〕 人間も亦た曾ては、野生動物であつた。吾々地球上の文明人と雖も、實は馴致された動物である。少くとも幾分かは馴致された動物である。全

ての文明人は、蒙昧人から發達した。若しも諸君が、更らに溯つて蒙昧人の足跡を辿るなら、蒙昧人は、尙ほ一層蒙昧なものから、又た動物に近い先祖から發達したといふことを發見するであらう。蒙昧人は、全ての文明人の共通の祖先である。若しも諸君が、文明人と雖も、蒙昧人を拵へ直したに過ぎないものであつて、單に幾分か變化したものに過ぎぬといふことを認めない限りは、諸君は到底、文明人の行爲を理解することも出来ぬし、亦た文明人の或種の性質をも明かにすることが出来ぬ。

『露西亞人を引かくと、その底から韃靼人が現はれる』といふ諺がある。韃靼人は露西亞人の先祖たる野蠻人である。此の『露西亞人を引かくと、その底から韃靼人が現はれる』といふ諺の意味は、露西亞人の表面にある薄い層を一と皮めくつたなら、其下は韃靼人だといふのである。

地球上のすべての文明人も同様である。文明は單に皮であつて、人間性の強大な

核心は野蠻的である。人道は單に習慣に過ぎぬ。しかも辛うじて習慣となつたばかりである。何故ならば吾々は、何の譯もなく、昔の蒙昧人の思想や感情や行爲に逆戻りするからである。どんな立派な人間でも、底の底まで穿つて往つたなら、必ずそつと蔭にかくしておきたいような、面白からざるものに突き當たる。若しも人間が透明體であつて、お互ひに見透はすことができ、その心の奥底に往來する全ての思想や感情をも知ることが出来たなら、人間といふものは實は鍍金細工であつて、中味よりも上部の方が、遙かに立派に光つて居るものだといふことを、一層明らかに知ることが出来たらう。

人間は大陽の子ではない。彼等は藪の子供である。吾々の性質のうちには、無い方が遙かにまさつてゐるものが澤山ある。若し吾々に、自分の性質の中に這入る可きものだけを選択する特權があつたなら、決して吾々の性質の中に加へなかつたような本能や行爲の仕方が澤山あるのである。是等の本能や行爲の仕方は、廢退的な

ものである。是等は吾々の先祖に取つては有用であつたが、現在の吾々には、環境が變化した結果、最早や無用なものである。

蒙昧人は、文明人の住む世界とは異つた世界に棲み、異つた行爲をして居る。蒙昧人は自然の子であつて、他の野生動物と全く變らぬ生活をして居る。彼等は穀物もなく、家畜もなく、唯だ野生の動植物によつて生活して居る。彼等は生さんがために野獸を獵し、魚を捕へ、又戰つてゐる。彼等は小さな隊伍即ち種族を形造つて復ひ歩るいて居る。そして絶えず他の種族との鬭争をつゞけて、自己の種族を維持して居る。彼等は無知で、迷信的で、又た貧乏である。彼等は全く、文字通りに「白から手へ」の、その日暮しを續けて居る。危険、恐怖、冒險、それが彼等の生活のすべてである。蒙昧人の間の道徳律は、「力は即正義」である。そして之は動物生活の狂暴な社會では、何處にも行はれてゐる法則である。

蒙昧人はその住む世界に適應してゐる。彼等は、之に必要な肉體を持つて居るし、

又その世界に生命を維持するために、必要な事をなさしめる本能をも持つて居る。

文明人は、彼等の祖先の野生の世界を脱して、大部分、技術的にして人工的な世界に生活してゐる。彼等の職業は安全である。彼等は集合して、大なる都市や國家をつくり、そして農業、牧畜、製造、鑛業、商業など、いふ大きな産業を續づけてゐる。その生活は協同的であつて、智識と富とが大に累積されて居る。そして一夫一婦主義と、多かれ少かれ一定した家族關係とが、蒙昧人や動物に於ける男女の亂交に代つて居る。そして全てのものゝ中で一番重要なことは、「凡て人に爲られんと欲することは、また人にもそのごとくせよ」といふことが、ほんの上部うへだけでもせよ、道徳の標準または理想として、蒙昧人に於ける力の標準に代はつて居ることがある。

文明人の性質の中には、最早や今日では無用な本能や行爲の仕方が澤山ある。是等の本能は、吾々の蒙昧な先祖から譲り受けたものであつて、丁度牛の角や、岩窟

の魚の目や、人間の耳筋肉などが残存してゐるのと同じ理由によつて残存して居るものである。そして最早や無用とはなつたが、消滅してしまふ程には、まだ充分の時間が経過して居らぬのである。

文明人の性質の中に残つてゐる廢退的本能こそ、文明人の不道德の主なる原因の一つである。諸君は原罪オリジナル・シンといふ言葉を聞いたらう。謂ゆる原罪といふ言葉は、吾々の性質の中に残存する廢退本能の爲に生ずる悪行に與へた名稱に過ぎない。吾々が悪い道を履んでゆくのは、吾々の先祖が遺こした本能に驅られて、悪い事をするからである。人間の心は、神と動物との格闘場だといふ諺がある。即ち神は吾々の性質の中にある、高等な、一層善な、文明的な、そして新しい本能を表はし、動物は、吾々を常に墮落に導かんとする下等な、古い、そして一層動物的な衝動を現はして居る。そこで吾々の文明の程度は、吾々の性質の中にある新しい環境、新しい社會生活に有用な新しい本能をして、無用な舊るい廢退本能に打勝たしめる程度に

よるのである。

【恐怖の本能】 恐怖の本能は、世界に於ける最も古い本能の一つである。この本能は、人間以前の昔から存在してゐたもので、人間は之を人間前の祖先から繼承した。初めて恐怖といふものゝ現はれたのは、動物の發達に於ける蠕蟲といふ段階あたりであつて、此の段階以上に屬するすべての動物には、恐怖がある。恐怖は危険や敵から遠ざからうとする本能であつて、即ち退却本能或は逃避本能である。蠕蟲以下の最も下等な動物は、敵が現はれても、一向に無關心である。彼等は敵に對しても、仲間に對すると同様に仕向けてゐるが、文明人は敵に對しては、極めて差別的である。恐怖の本能は、危険なるものに遭遇すると、迅速に退却せしめるものであつて、動物の行爲の上に、非常な進歩を齎らしたものである。即ち生存競争の上に、此の本能を持つたものは此の本能を持たぬものに對して、非常な利益を得るのである。危険と敵とに満ち充ちてゐる世界に於いては、極めて早くから恐怖の本能

の現はれことは少しも不思議はない。

恐怖を與へるものは、同時に又た闘争本能の原因となつて居る。敵が現はれた時、逃げるかそれとも闘ふかは、その場合の形勢次第であつて、どちらの行動を取る方が、結局自分に取つて、最も有利であるかといふ判断によるものである。吾々が敵に出遭つた時には、闘争感情によつて敵に突進するか、それとも恐怖感情によつて退却するか、何づれかである。この二つの感情は、同一の對象物によつて起されるものではあるが、互ひに全く相異なるものである。

原始人の世界には、危険と敵とが満ちてゐた。是等の敵は、單に今日よりも其の數が多かつたばかりでなく、比較的其力も強かつた。初め人間は全然武装して居らず、數千年後に至つて始めて武器を發明したのであるから、その當初には敵に對する人間の用意は、今日に較べて極めて貧弱なものであつた。蒙昧時代から文明時代に至る人類の進歩は、他の何事よりもこの恐怖の機會が減少したといふことが、

最も著るしい特徴なのである。

諸君は曾つて鳥が餌を食ひ、水を飲み、又は水を浴びてゐるのを見たことがあるだらう。一口食つては周圍を見廻はし、も一口食つては又た見廻す。それは常に戦々兢々として、敵に注意を拂つてゐる。眠るときでも、殆ど片眼は開いてゐる。彼等は常に、憐れむべき恐怖の狀態に追はれてゐる。全ての野生動物には敵がある。彼等は絶えざる警戒によつてのみ、この世界に生命を維持することが出来る。「南阿弗利加の羚羊は、平均二日か三日毎に、文字通りの命賭げで逃走しなければならぬ。そして一日のうちには幾度も、驚いて遁走して居るのである」。ガルトン氏は斯う云つて居る。そこで群團をなして生活する多くの動物は、その群團の中のある一匹が、他のものゝ食事をしたり眠つてゐる間、見張をする訓練が非常に進歩した居るのである。

人間もその當初は、不斷の恐怖狀態の中に生活して居つた。彼等は常に、何等か

の敵の手に陥る危険があつた。それは晝間森を徨ふて居る時ばかりでなく、殊に夜間眠つてゐるときに起るのである。そこで蒙昧人は常に疑ひ深く、常に危険で、常に警戒を怠らぬ。彼は何人にも信頼することが出来ず、亦何人からも信頼されなかつた。蒙昧人は自分の仲間にも何物をも期待しなかつた。そして折もあらば他人が自分に仕掛けるだらうと思はれる通りに、自分からも他人に仕掛けたのである。ラポックは、『蒙昧人の一生は、長き不安の連続であり、利己と恐怖の長き活劇である』と云つて居る。

今日でこそ吾々は座はつて食事をし、夜になれば横になつて眠る。そして食事や睡眠の終らぬ中にも、敵に襲はれはせぬかといふような心配は少しもない。そして幾千の人間は、先づ病原菌の恐怖以外には、大した恐怖も襲はれることなしに生活を續けて居るのである。

【恐怖の遺物】 吾々は、大きな聲や急激な音に驚く、之は大きな聲や急激な音が、真に危険を意味してゐた世界に適應して造られゐる、神経組織の結果である。吾々がわざと何所かに隠れてゐて、急に飛び出して誰かを捉まえる、殊に大きな聲でもあげて飛び出さうものなら、相手は眩度、ほんとに待伏をくつた場合のような、感動的の行動をする。そして吾々が、うまく待伏をやり遂げて、それを面白がることから、待伏が他人を攻撃する普通な方法であつた時代の遺物である。また斯うな瞞討だましうちの攻撃が有效なのは、人間がまだ或る程度まで、待伏時代の本能を持つて居るからである。

見知らぬものは、それが人間であつても、又た人間以外のものであつても、殊更らに恐怖の感情を起こさせる。吾々は見知らぬものに遭ふと、跳び退く。又た見知らぬものが現れると、別に大した理由がなくても、一種の不安を感じる。これは確かに、見知らぬ者は何ものによらず、仲間ではなくて常に敵であつた時代の遺物である。吾々は殊に大きな人間を恐れる。即ち其外形が吾々に對して、善かれ悪しかれ

大きな力を持つてゐる人を恐れる。この疑念は今日では無用であつて、却つて邪魔になる。それは恐怖に相當の理由があつた時代の遺物である。

吾々が蛇や蜘蛛に對して抱く恐怖は、恐らくは廢退的の感情であつて、それは今日でも吾々のうちに不必要な力を持つてゐる。蛇に對する恐怖は、猿からの遺傳である。猿はひどく蛇を恐れるもので、猿の檻の中へ蛇を入れると非常に恐怖する。猿は蛇に出會ふと、非常な恐怖に襲はれて、氣絶して木から落ちると云ふことである。これは別段不思議はなく、猿に取つては、蛇は最も苦手の敵である。彼等には迎ても蛇を殺すことが出来ぬ。熱帯地方の木に棲む大蛇は、猿に取つては致命的の敵である。そして棍棒を發明するまでは、蛇は人間に取つても、殆んど猿と同様に手におへぬ敵であつた。けれども人間が一度び棍棒や槍を手にするようになると、猿は最早や人間の敵ではなくなつた。武装して居らぬ人間は、か弱い一個の動物に過ぎぬ。人間が世界に優越した所以は、武装する智識を有してゐたといふ事實に因る

のである。

黒い物や、洞穴のような暗い場所や、又は普通の暗がりの場所でさへも、吾々に恐怖の感情を起させる傾向がある。其中に少しも危険な分子を含んで居らぬことがよく知られてゐる時でも、吾々は暗黒を恐れる。しかし蒙昧人に取つては、洞穴は野獸の巢窟であり、暗黒は齒牙を有するすべてのもの満ちてゐる深淵である。吾々は日か暮れると、戸内や戸外に火を點じて晝の仕事を續けるが、蒙昧人は日か暮れると、もう目が見えぬのである。

吾々が道に迷つた時に感ずる恐怖は、大部分は廢退的なものである。蒙昧人は迷ひ兒になると、實際に危険である。彼は道で出遭つた人間か動物かの當然の餌食になる。しかし今日吾々が町の中や森の中で道を見失なつた場合は、大して危険が身に迫つてゐる譯ではないが、それでも恐怖感情は實際の危険以上に烈しく働くのである。斯ように吾々は今日でも、道に迷ふことが實際危険であつた昔と同様に、強

い恐怖を感ずるのである。群をなして生活する動物は、獨りぼつちになることを嫌厭する。南米の半野牛に就いて、或る人は斯う云つて居る。『牡牛は見たところ、他の仲間を殆ど愛してゐるようでもなく、又た殆んど大した利害關係も持つては居らぬようであるが、それにも拘らず、その群團から離れてゐることは出来ぬ。若しも無理にその群團から離されると、その牡牛は、有ゆる苦悶のさまを示し、有らん限りの力を出してもとの群團に歸らうとする。そして一度び歸ることが出来ると、群團の真中へ飛び込んで、嬉しそうに仲間の友情に浸たるのである』

幽霊や、妖怪や、墓地に對する恐怖は、人間が世界の全ての災害を、嵐でも地震でも、病氣でも、すべて惡魔の仕業であると想像してゐた時代からの遺物である。原始人は、死人の魂は肉體を脱け出してから、暫らくの間、その屍の埋められた周圍を彷徨してゐると信じてゐた。今日の人々が、幽霊屋敷や幽霊墓地の説に、幾らか耳を借すところを以て見ると、この原始の信仰が依然として幾分か残つてゐるらし

い。

恐怖の本能は、危険や敵の多い生活に於いては、常に有用な本能である。そして今日文明人に取つても、勿論色々の方面に於いて、有用な本能である。しかし乍ら文明人は原始人よりも遙かに安全であるから、恐怖の機會も少くなつたのである。

吾々の機械組織(性質)が恐れるように順應して、出来上つてゐる物事に對しては、恐怖をするのである。そして吾々の機械組織は、過ぎ去つた蒙昧時代に於いて恐れねばならなかつたもの、即ち雷や、稻妻や、蛇や、孤獨や、見知らぬ人や、暗がり に對して恐怖するように出来上つて居る。是等のものは、何づれも吾々文明人に取つては、最早や危険ではないが、吾々が相變らず是れ等のものを恐れるのは、是等のものに恐怖を起こさせた、昔日の機械組織が遺つてゐるからである。病原菌のような微生物は、人間の生命や幸福に對して、蛇よりも何千倍も危険であるが、吾々の自然の衝動は、微生物よりも、一層蛇を恐れるのである。吾々は踊りよりも闘ひを

好み、農業よりも探險を愛し、有用的な職業よりも、遊戯や娛樂を好む。吾々の機械組織は、まだ近代的の生活と状態に適應するように、改造されては居らぬのである。

【闘争の本能】 闘争の本能は、力を以つて闘争し、壓服しようとする本能である。この本能は、恐怖本能とは異つた行爲をなさしめるものである。即ち恐怖本能は退却せしめるが、闘争本能は、攻撃せしめ、損傷せしめ、殺害せしめるものである。

闘争本能も亦た古い本能である。それは人間が發明したものでなくて、人間が世界に存在せぬ以前の數百萬年の間、闘ひ、傷き、そして斃れた、人間發生前の人間の先祖から、承け繼いだものである。ロームネスの説によると、闘争本能の初めで見られるのは、蟻や蜘蛛である。蟻や蜘蛛は、蠕蟲よりも幾分高等であるから、従つて闘争の本能は恐怖の本能ほどに古いものではなくて、幾らか後に現はれたものである。

一般に闘争本能は、高等なとして力の強い動物に著るしく、恐怖本能は下等にして力の弱い種屬に著るしい。鹿、兎、鼠、羊等の種屬が、生存競争の場裡に用ひる行動政策は、他の獅子、狼、犀等の種屬のそれとは異つてゐる。兎や鼠は闘ふよりも、逃げる方が巧みであるからして、逃走によつて生命を保つてゐるのが常である。是等の種屬は極めて有力な武器も、また適當な武器をも持つて居らぬ。之に反して獅子や犀は、適當な武装をしてゐるから、闘争といふ行動政策を取るのである。斯うに動物の或る種は、一般に遁走種屬であつて、恐怖本能によつて支配されてゐるが、又他の種は、闘争種屬であつて、普通に争闘本能によつて統御されてゐる。しかし遁走種屬とは云へ、その種屬の間には、食物や其他の生活資料を得る爲めに多少の争ひはある。また是等の受動的な種屬の間でも、男性がその配偶の争奪のためには、狂暴な闘争を行つてゐる。

動物界は、血塗みれた搖籃の中に育てられて來た。人類は殊にそうである。人類

は過去に於いて、この世界の優超を占める爲には、他の動物の種屬が曾てしなかつたほどの血腥い闘ひをした。原始人の間では他の人間又は他の動物との戦争が日常の状態であつて、平和は寧ろ除外例であつた。蒙昧人に取つては、種族外のすべての生物は、彼等の敵であり、掠奪の正当な目的物だつたのである。この時代にも、種族間の同盟もあり、また反対種族の同盟もあつた。しかし人間は常に、勝つ方に味方をしようとして居つた。だから今日でも、文明人同士の結合は弱く、世界の平和は不安である。今日の味方は明日の敵であり、昨日の友は今日の仇敵である。斯ような反覆常なき性質は、これ亦た一つの遺傳である。

争闘本能は、すべての文明人の間に残つてゐる。そして屢々子供同志の喧嘩や或は大人の戦争に現はれる。平和が餘りに長く續ぶくと、倦怠を生じて来る。そこで誰れかに突つ掛つて溜飲を下げようとする。

通りで喧嘩が始まると、夥しい群集が押しよせてくる。子供が二人喧嘩をすると

見るまに澤山の子供がその周圍に集つて、各々、誰かが撲ぐつたら、代りに撲り返へしてやらうと意氣こんで待つてゐる。ナイフや、連發のピストルや、その他の兇器は非常な賣行がある。一體かよふな現象は、吾々の文明性の表現であらうか、それとも吾々の野蠻性の發露であらうか。何人をも又た何物をも殺そうといふ考の無い時でも、兇器を持つて居ると思ふと、自づから野蠻性が唆られて、殺氣立つてくる。懸賞づきの拳闘試合を見物すると、その最初の一撃は、上品な敏感な人々をして面を蔽はせる。ところが一順見て居るうちに、血が湧き肉躍つてどちらかの方を最負するようになる。斯うなつて來ると、相手の方が撲られたり傷つけられてゐるといふことには、一向氣が附かなくなるのである。

今日、人類文化の大中心地に於いても、ある種の連中、酒場や賭博場に入り浸つてゐる連中は、尙ほ依然として原始的な雰圍氣に包まれてゐる。酒は理性を失はせ全く下劣な本能の虜にしてしまひ、飲む人を全くの野性に呼びもどす傾向がある。

大人でも子供でも、喧嘩の時には鐵拳を用ひる習慣があるが、之は大昔、人間がまだ武器を發明しない時代に、一般に流行してゐた戦法の遺物である。闘ふ時には、狼は齒牙を用ひ、野牛は角を、馬は脚を、獅子は前肢を用ひた。人間も獅子と同なじく、手を持つて、撲りつけた。

戦争本能は、最も文明の進んだ國民にも、非常に起り易い性質である。従つて如何に平和に酔つてゐる時でも、戦争の本能を突ついて、戦争を起すことは容易な事である。新聞紙が大きな見出しで書き立てる、喇叭は吹奏され、陣太鼓は叩たかれる。こうなると吾々は、もう相手の國民の喉を見がけて、飛びつかんばかりになり、又たそれに眞の満足と光榮を感じるようになる。劍は野蠻の象徴である。けれども其れは此地上にあるほどの、殆んど全ての文明人の心をひき附ける物である。人間が可なり闘争を好まなくなつたなら、下らぬ事で數百萬の金を費やし、血河の慘を呈することもなくなるだらう。

曾て米西戦争の際に、キューバ島に派遣された合衆國軍隊の一部は、平和の布告されるまで、遂に實戦に参加することが出来なかつた。私は、その當時非常に強い印象を與へられた、新聞記事を記憶する。といふのは其等の軍隊が講和條約の調印を知つた時に、多くの軍人は非常に失望したと云ふことである。彼等は何故に失望したのであらう。キューバはこの條約によつて獨立し、戦争の明白な目的は達せられたのである。それにも拘らず、彼等は不満足であつた。何故であらうか。即ち彼等は、キューバ島獨立の慾求以外に、滿すべき他の物——慾望——を有してゐたからである。それが戦争本能である。若しも是等の軍人が二三の實戦に参加し、彼等の野蠻な本能を働かした上で平和が克復されたのであつたなら、彼等は疑ひもなく、満足して凱旋したのである。

婦人や少女には、狩獵本能が弱いのと同じ理由から、闘争の本能も弱いのである。何故ならば人間性、基礎の築かれた過去の原始時代に、戦闘や狩獵に従事したのは、

男であつたからである。

多くの高等動物では、男性は殆んどすべての闘ひを引き受ける。野生の牛も、馬も、鹿も、猿も、その他の動物も同じことである。水牛の群が攻撃を受けた場合には、牝や仔を真中に入れて、その周囲を牡が取り囲み、皆な頭を外に向けて圓陣を形造るのである。人間も曾て平原で印度人に襲撃された場合には、同様な戦術を用ひて、女や子供を中心にして、圓形の陣を形造つたものである。多くの動物の種では、男性がその偉大な體軀と力とを備へて居るのは、主として彼等がその種屬の護衛者であつたからである。

原始人の日常の状態は戦争であつて、平和はむしろ例外であつた。

人類の達すべき究極の状態は、恒久的の平和であらう。戦争などといふものは、歴史で讀む以外には、全く考へられなくなるだらう。時が過ぎ去ると共に、闘争本能は追々弱くなり、又た追々恥づべきものとなり、人道的な同情的な本能が、それ

に比例して強くなる。そして遂には人間は、全ての争議を、眞理と正義の法廷に於いて解決するようになるだらう。

吾々は今日、進歩の中間時代に生きて居るのである。平和が常の状態ではあるが、尙ほ闘争本能が残つてゐて、屢々個人と個人との間に、又は國民と國民との間に、決闘や戦争が行はれる。今後の國家と國家と間は、過去の個人と個人との間と同じであらう。過去に於いては、個人個人は、常に争闘によつて全ての争議を解決して居つた。原始人の間には、裁判所といふものはなかつた。今日に於いては、個人個人が争闘によつて争議を解決することは、不法とされてゐる。そこで文明に遅くれた人々のみが、闘争といふ手段を用ゐてゐる。そして文明人は、眞理の判断や裁判所の裁定を一層善いものとして居るのである。その中には國家と國家との間も同様になるだらう。即ち國際的の争議は、戦争や軍隊によらずに、諸國によつて構成された裁定機關によつて解決されるようになるだらう。

【狩獵の本能】 最も下等な蒙昧人は、一本の穀草も、一匹の家畜も持つて居らぬ。

彼等は獵人である。野犬や野猫と同様に、彼等はその性質の中に、餓えれば自づと彼等を驅つて獲物を求めに出かけさせる本能を持つてゐる。しかし蒙昧人は、決して遊戯の爲めに狩獵をするのではなくて、生活の爲にするのである。彼等はその周囲の生物の生命を奪つて、その屍から食物や衣服を得るのである。

文明人は、農業、鑛業、製造業、又はその他の職業によつて、生活の資を得て居る。今日では狩獵本能は、人間生活の日常の務としては働かないが、それが尙ほ残つて居ることは事實である。日頃の仕事をやめて、自分の好きな事の出来る休暇にでもなると、獵銃を擔ついで出掛けてゆく。そして飽きるまで、鳥や獸を殺すのである。吾々が狩をするのは、餓えて居る爲ではなくして、人間の祖先から遺された狼の如き本能を働かし、表現せんがためである。即ち吾々の祖先が獵人であつたから、吾々も狩獵をやるのである。吾々は丁度、犬が羊を殺すのと同じ理由で、吾々

の祖先が人間的狼であつた時代から残つてゐる本能に驅らるゝまゝに、他の動物を殺すのである。

狩獵本能は、どの文明人種にも極めて強く、殊に子供には著しい。之は私自身も同じことで、少年時代の喜びの中で、何よりも野生的で、そしてたまらなく面白かつたことは、物を打ち倒した時の野蠻的な喜びである。「凡そ人に爲されんと欲することは、爾曹また人にもその如くせよ」といふ金賊を、生活の法則とする人間の性質の中に、斯ような残忍性のあることは悲しむべき事實である。

狩獵本能は、鬭争本能と密接な關係を持つてゐる。原始人は萬有に對して、人間にも又た人間以外のものにも、一樣に戰つてゐた。蒙昧人にとつては、自分の群團に屬せぬすべての人々や、自分の味方でないものは、悉く敵であつた。それ等の敵は、色々の方面に、或は食物として、衣服として、或は奴隸として用ゐた。若し何の役にも立たなければ、生存鬭争の競争者として、どの道除いてしまつたのであ

る。

文明人の間では、一般に平和を欲するから、人を殺す機会が少くなつた。そこで多くの人々は、狩獵によつて闘争本能や戦争本能を満たしてゐる。戦争は彼等の本能に満足させるほど度々ない。彼等は同類と戦ふ権利を奪はれてゐるから、時々動物に對して遠征を試みる。この動物征伐の勇者は、世の中が進んで、最早や生きた鳥が撃てなくなつたので、焼物の鳩や硝子球を見がけて、勇ましく發砲する彼のトラップ、ショットター（土器や硝子球を投げあげて、それを的にして、射撃を練習する人）と同然である。狩獵本能は争闘本能と結合して、今も尙ほ兇暴な出来事が多くの人の心に與へる一種の魅惑となつて居る。日々の新聞が、殺人や其他種々なる流血の惨事の記事を満載してゐるのは、讀者が好んで讀むからである。然らば何故に人々は、かゝる三面記事を好んで讀むかと云へば、それは人間の祖先が、猛獸であつたからである。血に對する渴望は、極めて古い人間性の中の、最も古い欲望の一つ

である。此の古い欲望は人間性の奥深く食ひ込んでゐて、その根底をなしてゐるから、血に對する渴望は容易に抜けないのである。

狩獵本能はこれを働かさねば、ちきりに消滅してしまふ。そこで若し同情的の本能が強よまるなら、人々はやがて殺伐に對する慾求を失つてしまふだらう。そして人々は野生の動物の生命を奪ふよりも、それを育てたり、研究したりすることに、一層の愉快を感じるようになるだらう。今日でも大多數の文明人は、同情の本能が可なり強く、大抵の場合には、狩獵本能や闘争本能を押しつけるだけの力がある。そして之を何度も繰返して居るうちには、やがて一つの習慣となる。今日では文明人の男女の間には、よし時として闘争本能が起つたところで、それは子供を一寸叱かつたりするような瞬間的な憤怒といふ、限度を越えない人々も澤山ある。斯うに闘争本能は尙ほ存してはゐるが、之れは一層高尚なすべての本能を押し除けて、無暗を他人に殺戮したり、破壊を敢へてする程に、しかく強大ではないのである。

多くの社會では、狩獵の本能や殺戮の本能を無暗と働かせることを、禁する法律が制定されてゐる。そして人間が進歩すればする程、一層かような法律が出来たらう。斯くて進歩の遅くれてゐる人々は、一層進歩した人々によつて抑制せられるのである。謂ゆる「トラップ、シューティング」といふのは、鳥を飛ばして射落す遊戯であるが、文化の進んだ國々では、既に法律によつて禁止せられて居る。今日の文明人が後世から野蠻人と考へられる、恐れのある事柄の一つは、吾々が快樂の爲にする狩獵を極めて冷淡に看過して居ることである。狩獵のやりたい者は、何人でも鐵砲を擔いで野原へ出かけてゆき、鳥や其他の、少しも人間に害を與へない生物を單に自己の古い野蠻的本能を満たすために、自由に撃ち殺すことが出来る。しかも社會は之に對して、ある特殊の場合に禁するといふ位な、極めて不十分な保護策を講じて居るに過ぎぬ。快樂のための狩獵は、殺人と少しも選ぶところはない。時を経るに従つて、同情や仁愛の本能が益々強くなつて、一層人間性を支配する

ようになり、そして廢退的の野蠻な本能は、それに比例して一層力を失つて來るだらう。遊戯の爲めに鳥類を殺戮する遊獵者は、生活のために狩獵を行ふ蒙昧人と全然遊獵などをせぬ文明人との、中間に位するものである。獵人は結局武士と同じように、永久になくなるであらふ。

【種族的の本能】 蒙昧人は種族を形作つて生活する。種族と種族との間の關係は、概して交戦状態である。そこで蒙昧人の道徳的感情や觀念の範圍は、どこ迄も種族的である。蒙昧人にとつては、その屬する種族の人々は、大部分眞の血族である。だから自分の種族の人々こそ、自分と生活を共にしてゐる人間であり、世界に於ける唯一にして眞實に、重要なものである。自己の種族外の全ての者は之を襲撃し、瞞着し、その持物を奪ひ、殺害し、肉を啖ひ、或は之を奴隸にし、慾するがまゝに爲し得るがまゝに、どうしようとも差支のない敵である。

常に吾々は、自分の仲間に屬する人々を、他の人々よりも、一層に重要なものと

考へ、又た吾々の棲まつてゐる世界の一部分を、宇宙の中心のやうに考へる傾向を持つてゐる。此傾向は、殊に單純な人々に著しいのである。吾々の智識が進み、眼界が擴がるに従つて、そう云ふ傾向は段々少くなつてゆく。

私は曾て、アラバマ州の南西部なる、モビール市から三十哩ほど離れた僻遠の地の、或る住民の家に三週間暮らしたことがある。其地の人々は、モビール市を世界ぢうの、よし最大ではないまでも最も大切な都市だと考へてゐた。モビール市は、彼等が實際に見た唯一の都市であり、萬事を熟知する唯一の都市であつた。或る晩のこと、會話の序に、私はモビール市の人口を質問して見た。誰れも正確には知らなかつたが、その家の母親は、曾てモビール市の人口は約百萬あるといふことを、何かで讀んでことがあると答へた。そこで私が、シカゴ市の人口は、モビール市とパーミンガム市と、モントゴメリー市と、それから尙ほその上に、アラバマ州の残りの全部を加へた人口よりも更に多く、その長さはこの家から、モビール市までの

距離位あつて、大きさはモビール市の約四十倍位あると話した所が、彼等一同は、息をつまらすほど驚いた。

西班牙の國民は、自國の新聞や書籍以外のものは讀まず、他國民に就いては、その見解は狭く、極めて不完全な觀念を持つてゐるさうである。彼等は首府マドリードを世界の中心であると考へ、他國民は西班牙人よりも、劣等な人種であると思つてゐる。

亞米利加人も、西班牙人に稍々近いものがある。亞米利加人は世界の他の國民を一種怒みの目で見て居るが、亞米利加人以外の人々には、是等の國民は事實上、亞米利加人よりも優れてゐると認められて居るのである。私は萬國博覽會がシカゴ市で開かれた時、白耳義の新聞に、この博覽會に臨んだ白耳義の代表者の寄稿した記事を讀んだことを記憶する。その記事には、亞米利加人は一般に、自分が他の國民よりも優れてゐるといふ觀念を抱いて居ることを、一種の不思議なこととして述べ

てあつた。

かの狭量と頑迷は、どの時代に於いても、人々の感情や理解力に著しい影響を與へて居る。今日の謂ゆる最高文明の社會に於いても、國際間に存する——殊に戦争や軍備に著しく表はれてゐる——敵意は矢張り其結果である。斯ような狭量と頑迷とは、要するに原始人が抱いてゐた種族感情の遺物に過ぎないもので、多少それが擴大されたといふだけである。

古代希臘人は、人類を二つの階級、即ち希臘人と『野蠻人』とに分けてゐた。希臘人は希臘の住民で、『野蠻人』とは、世界の中心部から離れて住んでゐる、希臘人以外の人類を云ふのである。彼等は、世界は楕円の形をして居つて、其真中にオリンブス山があると思つてゐた。希臘人は、高さ九千七百呎のオリンブス山を、世界最高の山だと信じてゐた。そしてこの山の巔には、希臘の神が住んでゐると思つてゐた。希臘人は、自分等は神の後裔であり、神の選民であると思ひ、他の『野蠻人』は、希臘人に利用される爲めに生きて居る、取るに足らぬ人間に過ぎぬと思つてゐた。

古代羅馬人も亦た、羅馬人以外の人間——希臘人も含めて——は、『野蠻人』と考へてゐた。是等の謂ゆる『野蠻人』の多くは、實際には羅馬人よりも優れてゐたが、羅馬人は彼等を遇するに、常に侮蔑を以つてした。『野蠻人』は實際、羅馬人の『農具』であり、又た羅馬の祭日に、羅馬人の娛樂に供するために、互に殺し合ひをする闘士であつた。羅馬人は、己れの謂ゆる野蠻人たる奴隸の生命を奪ふことは、今日吾々が牛を殺すのと全然同じように、自由であつたのである。

道徳的感情は、人類の歴史時代の中に、著しく進歩した。今や人々は、その道徳的義務の範圍の内に、最も野蠻な種族に較べると幾千倍もの多數の人間を含めて居るのである。斯ように道徳が擴大されたのは、鐵道や、電信電話や、新聞等による交通や運輸の機關の進歩により、又た人間の同情的な想像力の發達によつて齎されたものである。或る國民が、他の國民と雜居してゐると、双方ともに、全く同じ

ものだといふことが解つて来る。斯くて互ひに、他の國民の立場に身をおいて見るから、己れの愆すことを、人に施すようになってくる。

特殊の場合に於ける少數の人々は例外であるが、一般には、人間の道徳的の考は、人類といふ範圍外には及んで居らぬ。人類以外のものは全く問題外であつて、それ等のものは、これを攻撃し、打ち、餓えしめ、殺し、肉を啖ひ、これを瞞着し、更らに好奇心から目茶斬りにしたり、娛樂のためにすらも撃ち殺す。『野生』動物、即ち人間といふ種族に少しも縁因のないものは、殊に人間的な正義や慈悲のお蔭を蒙つて居らぬ。彼等は全く、射撃の練習をしようと思ふ人々の、標的と見做されて居るに過ぎないのである。

種族的本能とは、自己の團體を擁護し、自己の生活上の地位を誇大視する本能である。これは偏頗の本能であり、やがて人をして『我國！ 永へに正しかれ。然し正しからうが正しくなからうが、之は我國である』と云はしめる本能である。『愛國

心』は一般に知られてゐるように、この種族的本能の表現である。けれども眞の愛國者は、祖國が世界の唯一の國であるとも、亦た必ずしも最善の國であるとも信じない。唯だ常に祖國が、現在よりもより善き國となることを望み、又た其爲に努力する人である。

『世界は吾が祖國なり』。トーマス・ペーンは斯う云つた。斯ような言葉は、とても人類のうちの或る特殊な團體にのみ限つておくことの出来ないほど、大なる同情心を持つ人から聞かれる言葉である。苟もこの偏狭な種族的本能を完全に脱却した人は、唯に人類の範圍内に止どまらず、感覺を有する全てのもの、兄弟である。

第五講 文明人の野蠻性

【遊戯の本能】 遊戯の本能は、文明人にも必ずしも無用の遺物ではない。それは蒙昧時代に有用であつたと同じく、今日でも尙ほ效用を有してゐるのである。然し高等動物間の遊戯の一般の形式は、確かに廢退的の遺物である。

遊戯は自然の教育である。それは生活に對する準備である。殆どすべての高等動物の子供は、遊戯をするものである。そして彼等が遊戯をする時には、成長してから實生活で行ふことを練習するのである。仔犬や仔狼は、遊ぶ時に互に掴み合つたり、追つかけまはつたりするが、それは後日大きくなつてから、彼等が他の動物を追撃したり、襲撃したりすることをその仕事にするからである。仔猫は好んで糸玉や鞠をもてあそぶが、糸玉は鼠である。山羊や綿羊の仔は、飛んだり跳ねたりし

て遊ぶ。それは——少くとも野生生活に於ては——後日彼等を追撃する肉食動物から逃れる爲の替古である。又た魚類は縦横に水を潜つて遊び、猿猴類は木の間でぶらんこをしたり、ふざつけまはつたりする。

吾々が遊戯をする時には、吾々は學校へ行つてゐるのであつて、しかもこの學校たるや、世界中で最古の學校で、世界中に未だ一つの校舎も校長もなく、また地球上に人間さへゐなかつた大昔から存在してゐたものである。アルファベットも綴字の本も考へ出されぬ前の何萬年間といふものを、野生の山羊は山上の學校へ、野生の猫は林中の學校へ通つてゐたのである。

然し人間の遊戯は、殆どすべて戰である。それは鬭争と戦争との生活の準備である。近世の文明社會は、協同的になつて、文明人は平和を誰しも理想としてゐるにも拘らず、吾々の遊戯は、尙ほ古代の形式を維持してゐる。吾々は實に、蒙昧人の學校で處世法を學んでゐるのである。斯ように吾々は、未來の現實生活の練習と云

ふよりか、寧ろ過去の生活の復習をしてゐるのである。フットボールや、ベースボールやクリケットは、二つの種族間の模擬戦ともいふ可きものである。山羊の仔がよく躍りまはつて遊ぶのは、岩から岩へと過ちなく飛び越え得るように、脚力を養ふのである。野生の山羊の仔は、後日、狼の飢ゑた口と速い脚とが後を追ふ時は、大いに走つたり、飛んだりしなければならぬだらう。そこで怠らずにその勉強を續けて、疾走と跳躍との學課をよく覚えこんで置く必要がある。

然し家畜の山羊は、平地に住まつてゐる。彼等は恐らく山が何であるか、狼がどんな形をしてゐるかといふことすらも知らぬだらう。然るにこの家畜の山羊も、遊ぶ時には依然として大昔の山嶽生活の練習をしてゐる。それは山羊ばかりでなく、文明人の子供も全く之と同じであつて、彼等が遊ぶ時には、太古の蒙昧時代の生活の誓古ばかりしてゐるのである。

これらの蒙昧人の遊戯形式は、やがて身體を鍛錬し、器用に敏捷にする効力が

ある。然し何故に吾々が遊戯に、計算や協同の形式を用ゐないで、競走や鬭争の形式を用ゐるか、何故に吾々の遊戯が人をやつつける練習ばかりであつて、之を救ひ上げる練習でないかといふと、それは遊戯本能が未だ近代化せられぬからである。

山羊と狼との遊戯の形式が相違してゐると同じ理由で、男の兒の遊戯本能は女の兒の遊戯本能とは異つた形式を取るものである。彼等の練習は、その目的を異にして居る。少年は竹馬に乗つたり、ボールを投げたり、勝負事したりすることを楽しみ、少女は人形いちりや、お客遊びを好むものである。

【模倣の本能】 模倣本能といふのは、態度や、服装や、言語や、歩行や、信仰や職業や、その他何かにつけて、他人のする如く吾々をして眞似させる本能である。

この人眞似をする傾向は、文明人に於いても必要以上に強いものである。吾々は屢々、自分の爲にならぬばかりか、却て不利なものにも拘らず、昔から残つてゐる本能に黙従して、徒らに他人を模倣する。

群をなしたり社會を作つたりして生活するすべての動物、即ち群棲動物に於いては、各自の行動は主として他の一群のものゝ行動によりて決定される。群の仲間の行動には、一種の統一性がある。仲間の五六のものが何かして見せると、後のものは同じことをする傾きがある。

水面に浮かんで遊んでゐる目高は、その中の二三匹が沈むと、何百匹揃つて沈んで了ふ。これは鳥類に於いても同じことであつて、彼等は各々みんながする通りにする爲に、機械をかけられてゐるようなもので、全く何も考へないで——屢々その考へに反することもあるらしい——それを行ふのである。然し時たまには、一群の鳥が飛上つてゐる時に、一羽か二羽が創意を有する鳥があつて、後へ残つてゐることがある。けれどもこれは一般に、何回となく同じ類ひの警報を繰返した結果であつて、飛立つことを拒んだのは、他のものよりか感覺と意志との強い鳥である。斯ような經驗が重なると、漸次に本來の本能を變化する。

兒童は極めて模倣的である。彼等は常にその周圍の人々、殊に彼等の空想を刺戟したり、又はえらそうに見えたりする人々を真似るものである。兒童の意志は弱いばかりでなく、訓練されて居らぬ。それは主にも、純粹な衝動から成立つて居り、豫め定つた方向に導くことは出来ぬ。それはふはくして居り、偶然的である。また理智に於いても、兒童の理智は發達が不十分であつて、考へる力がない。それは何でも教へられた通りに信じてゐる。子供と一緒に歩く時によく見受けることであるが、私が咳をしたり唾を吐いたりすると、彼等もきつと咳をし、唾を吐く、私が後手を組んで歩けば、彼等も後手を組む。私が怒鳴ると、彼等も怒鳴る、何か意見を述べると、彼等もその通りに話す——何んでもかんでも、私の示す標範と出来るだけ同じことを、彼等は反復するのである。そして私は子供の時に、如何に自分がその時々々に崇拜してゐた人々を常に真似るのに苦心してゐたかを思出すことが出来る。

蒙昧人は色々の方面に於いて、兒童である。彼は兒童と同じような訓練のない意志や、落ちつきのない點や、時々刻々内部から起る衝動によつて支配される傾向や經驗の缺如や、心の纖弱な所や、實生活に當つて何を爲し何を考ふべきかを、他人の暗示に待つ點などを共通に有してゐる。蒙昧人は服裝に於いても、小屋の建て方に於いても、信仰に於いても、相互に見倣ひ、同一の習慣と傳説とを奉じて居る。蒙昧人は先天的の物眞似上手である。彼等は完全に他の動物の音聲を眞似ることも出来るし、相手の身振や音聲を眞似つゝ、人の言つたことを一語も違へずに復誦することが出来る。又た普通蒙昧人は、何か尋ねられると、それに對して答へる代りに、訊かれた問ひを言ひかへすのが常である。蒙昧人は斯ように眞似が上手であるが、何か自分の知慧で判斷することになると、全く駄目である。

流行は模倣本能の現はれである。婦人が男子よりか模倣心が強いのは、彼等は一般に、より多く兒童心理の特徴を有するからである。服裝に流行があるように、思

想にも流行がある。一社會の人々が舉つて一定の信仰を有する時に、一人意見を異にするのは誰しも六づかしい。これは、丁度他の鳥が残らず飛立つ時に、一羽だけが止まつて居ることが六づかしいのと同様である。

獨立と、自主と、創意とは、模倣本能に反對して之を弱くし、且つ之に代はるものである。他を模倣する傾向が弱いこと、劣つてゐることを表はすように、これらの性質は、反對に強みと成熟を表はすものである。『天才の偏狂』といふ言葉は、他に優れた獨創的な人物は、凡人と振舞ひを異にするといふ事實を現はすものに外ならぬ。私は曾てブラウン大學のレスター・エフ・ウオード教授から斯ういふ話を聞いたことがある。彼が九月のある暖い日に麥藁帽子を被つて、ワシントンのペンシルヴァニア街を歩いて居つて、も少しでひどい目に合ひかけたといふことである。九月の第一日には、麥藁帽子を脱くのが一般の習慣で、その晩夏の午後、ペンシルヴァニア街に遊んでゐた子供達や子供のなりをした大人等は、麥藁帽子に關するこの